

竹 河

1 とりかへしうらみきこえ給ふて (四番13・253)

とり返す物にもがなや世の中をありしながらのわが身と思

はん (未詳) (河)、(休) (上句ノミ)

2 おりてみばいと匂もまさるやとすこし色めけ梅のはつ花

(四〇〇・259)

よそにのみ哀とぞ見し梅の花あかぬ色香はをりてなりけり

(古今集卷二、春上、三、題しらず 素性法師・素性法師

集、一五〇)、梅の花を折りて人のがりやるとて・古今六帖

第六、梅、言究六卷) (新) (大) (集)

3 よそにてはもぎゝなりとやさだむらんしたににほへる梅のは

つ花 (四〇〇・259)

①形こそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ (古

今集卷七、雑上、八七三、女どもの見て笑ひければよめる

兼芸法師・古今六帖第三、法師、三三〇、けうせい法師)

(拾) (新)

②伊勢の海の釣のうけなるさまなれと深き心は底に沈めり

(後撰集卷十五、雑二、二〇六、姿あやしと人の笑ひければ 躬

恒) (拾)

4 さらば袖ふれてみ給へなどいひすさぶにまことは色よりもと

くちくひきうごかしつべく (四〇〇・259)

色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも

(古今集卷一、春上、三、題しらず 読人しらず) (釈前)、

〔釈書〕(奥)〔最〕〔紹〕(香こそ哀れに、〔紫)〔異)〔河)〔二)〔

湖)〔上句ノミ)、〔休)〔第二三四句ノミ)、「香こそ哀れに」、

〔孟)〔屋)〔岷)〔引)〔新)〔第二句ノミ)、〔全)〔対)〔事)〔評)〔

集)

5 にしのわたどのゝまへなるこうばいの木のもとにむめがえを

うそぶきてたちよるけはいの花よりもしるくさとうちにほへ

ればつまどおしあけて人々あづまをいとよくかきあはせたり

(四二八・260)

①梅が枝に 来居る鶯 や 春かけて はれ 春かけて 鳴

けどもいまだ や 雪は降りつつ あはれ そこよしや

雪は降りつつ (催馬楽、梅が枝、二〇) (〔釈前) (〔奥)梅が

枝にきめるうぐひす春かけて、〔紫)〔異)〔河) (一) (〔休)

〔紹)〔孟)〔岷)〔引)〔新)〔全)〔対)〔事) (集) (

②梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみ

ける (古今集卷一、春上、三、題しらず 読人しらず・兼

輔集、二六三、いと忍びたる移香の人しるばかりありけれ

はその女に、「香にぞしみぬる」(〔釈書)香こそしみぬる

6 こよひはなをうぐひすにもさそはれたまへのたまひいだし

たれば (四三二・261)

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯誘ふしるべにはやる

(古今集卷二、春上、二、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌

紀友則・古今六帖第一、のこりの雪、三〇六、同第一、春の風、

三三三、友則・友則集、一四六、寛平御時后宮歌合、三三三)

〔奥〕(上句ノミ)、〔異〕まかせてぞ(第百廿七)、〔河〕(孟)〔屋〕
〔唄〕

7 少将もこゑいとおもしろうてさきくさうたふ(四三〇・261)

この殿は 宜も 宜も富みけり 三枝の あはれ 三枝の

はれ 三枝の 三つば四つばの中に 殿づくりせりや 殿

づくりせりや(催馬楽、この殿は、三三) 〆秋前〆〆奥〆

〔紫〕〔異〕〆河〆〆孟〆〆唄〆〆引〆〆全〆〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

〔集〕

8 竹がはをおなじこゑにいたしてまだわかけれどおかしうゝた
ふ(四三二・262)

竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ

花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴へて(催馬

楽、竹河、三三) 〆秋前〆〔紫〕〔異〕〔河〕〆〆一〆〔休〕〔絶〕〔孟〕

〔唄〕〆〆湖〆〆引〆〆玉〆〆全〆〔対〕〔事〕〔集〕

9 むひのすすみてはしのおる事もつゝまれずひがことするわざ
とこそきゝ侍れ(四三三・262)

思ふには忍ぶることぞまげにける色には出でじと思ひしも

のを(古今集卷十一、恋、三三) 〆題しらす 読人しらす・古今

六帖第五、人にしらす、三三三) 〆秋前〆色にいでじと、

〔奥〕(上句ノミ)、〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕

10 人はみな花に心をうつすらむひとりぞまどふ春の夜のやみ
(四三三〇・262)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠くるゝ

(古今集卷一、春上、四、春の夜梅の花をよめる 躬恒・古

今六帖第六、梅、三三三) 〆躬恒・和漢朗詠集卷上、春、春夜、
二、躬恒) 〔新〕(第二句ノミ)、〔事〕〔集〕

11 竹がはのはしうちいでし一ふしにふかき心のそこはしりきや
(四三三二・263)

①紅葉はの流るゝ時はたけ川のふちのみどりも色かはるらむ

(拾遺集卷七、雑秋、二三、題しらす 躬恒) 〔河〕〔孟〕

〔唄〕

②竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ
花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴へて(催馬

楽、竹河、三三) 〔唄〕〔湖〕

12 やよひになりてさくさくらあれば(四三三六・263)

①桜咲く桜の山の桜花咲く桜あれば散る桜あり(未詳) 〔秋

前〕〔秋書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〆〆弄〆〆一〆〔休〕〔孟〕〔屋〕

〔唄〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔集〕

②桜花ちりかひ曇れ老いらくのこむといふなる道まがふがに
(古今集卷七、賀、三三) 〆堀河のおほいまうちぎみの四十賀

九条の家にてしける時によめる 在原業平朝臣・伊勢物

語、一七) 〔秋前〕ちりかひまがへおいかくの……みちまど

ふがに、〔秋書〕みちまどふへく、〔奥〕〔孟〕〔引〕道まどふ

がに、〔紫〕、〔屋〕(上句ノミ)、〔唄〕、〔湖〕(第二句ノミ)、〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

13 花とりの色をもねをも時にしたがひてこそ(四三三三・266)

花鳥の色をも音をもいたづらにもものうかる身はすすずのみ

なり(後撰集卷四、夏、三三、かへし 藤原雅正・貫之集、

〔二六〕二、返し、「色をも香をも……すぐすなりけり」〔紫〕
すぐすなりけり、「引」〔事〕〔評〕〔集〕

14 ちりなむのちのかたみにもみまほしくはひおほくみえ給を
〔四七〕二・268

さくら色に衣は深く染めてきむ花のちりなむ後の形見に
〔古今集卷一、春上、六、題しらず 紀ありとも・古今六帖
第六、さくら、三〇四三、きありとも〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕

〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔二六〕〔評〕〔集〕

15 桜ゆへ風に心のさはぐかなおもひぐまなき花とみる〜〔四
六八・268〕

①人はかる心の隈はきたなくてきよき渚をいかですぎけむ
〔後撰集卷十、恋室、四四、忍びて通ひ侍りける人今帰りて
などたのめ置きておほやけの使に伊勢國にまかり帰りまで
きて久しうとはす侍りければ 少将内侍・兼輔集、二六三、
おほやけの御使に齋宮にまで返りなむとてふるく知りけ
る女といふはさいぐの内侍なり、「心の内は……いかで行
きけむ」・同、二六六、「心の内は……いかですみけむ」
〔河〕〔岷〕

②驚のわれて羽ぐむ桜花おもひぐまなくとくも散るかな
〔新撰万葉集卷上、春、一七〕〔拾〕〔新〕

③いつ方に立ち隠れつゝ見よとてか思ひぐまなく人のなり行
く〔後撰集卷一、恋三、五五、あひしりて侍りける女の心な
らぬやうに見え侍りければつかはしける 藤原後藤朝臣〕

〔二六〕

④折りて見は近まさりせよ桃の花思ひくらしして桜惜しまじ
〔紫式部集、二二六、桜を瓶にさして見るに取りも敢へずち
りければ桃の花を見やりて〕〔集〕

16 心ありて池のみぎはにおつる花あわとなりても我かたによれ
〔四一四・269〕

枝よりもあだにちりにし花なれば落ちて水も泡とこそな
れ〔古今集卷一、春下、八、東宮の雅院にて桜の花のみか
は水にちりてながれけるを見てよめる 菅野高世・古今六
帖第六、さくら、三〇四号、菅野たかよ、「枝にてもあだにち
りぬる」〕〔河〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔二六〕〔評〕〔集〕

17 桜花にほひあまたにちらさじとおほふばかりの袖はありやは
〔四九三・269〕

①大空におほふばかりの袖もがな春さくはなを風にまかせじ
〔後撰集卷二、春中、六、題しらず 読人しらず・寛平御時
后宮歌合、三五三、大空を〕〔河〕風にしらせじ、〔休〕
〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔玉〕〔上句ノミ〕、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔評〕〔集〕

②あはれてふ事をおまたにやらじとちや春に後れてひとりさく
らむ〔古今集卷三、夏、二六、卯月にさける桜を見てよめる
紀としさだ〕〔拾〕〔上句ノミ〕

18 よにかたくなしきやみのまどひになむおぼしるかたもあら
ば〔四九七・270〕

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

- (後撰集卷十五、雜二、二三、大政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとめてまらうどあるじ酒あまた、びの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三三・兼輔集、一三六五、子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言)〔紫〕〔異〕、〔河〕(下句ノミ、真本下句アリ)、△一▽、〔孟〕〔屋〕〔新〕(二二句ノミ)、〔事〕〔評〕〔集〕
- 19 つれなくてすぐる月日をかぞへつゝ物うらめしきくれの春かな(二四〇二・271)
惜しめども春の限りのけふのまた夕暮にさへなりにけるかな(後撰集卷三、卷下、題しらず 読人しらず・伊勢物語、一〇〇)〔新〕
- 20 わかき心ちにはひとへに物ぞおほえけるあさましきまでうらみなげば(四二二・271)
身をつみて長からぬ世を知る人はひとへに人を恨みざらなむ(続後拾遺集卷十四、恋四、四四、藤原義孝命もしらぬ世にといひつかはしける返りにごとし 読人しらず)〔引〕
- 21 つらきもあはれといふ事こそまことなりけれと(四二六・272)
①立ち返りあはれとぞ思ふよそにても人に心をおきつ白浪(古今集卷十一、恋二、四四、題しらず 在原元方・古今六帖第三、浪、三三〇)、もとかた、「君に心を」(花)(休)(眠)
②嬉しくは忘るゝ事もありなましつらきぞ長き形見なりける
- (新古今集卷十五、恋五、一四三、題しらず 深養父・古今六帖第四、雑の思、三〇四二、深養父)〔弄〕〔孟〕(第二句ノミ)、(一)うれしきは……ありぬべし、〔細〕〔休〕〔紹〕〔眠〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔入〕〔集〕
- ③ことわりと思ひつゞけてながむればつらきも人の哀れとぞ思ふ(未詳)〔引〕
- 22 めしいれてやはめくばせたてまつらましかばこよなからまし物を(四二一三・272)
世を海のおまとし人を見るからに目くはせよとも頼まるゝ哉(伊勢物語、一五七)〔河〕
- 23 けふぞしる空をながむる気色にて花に心をうつしけりとも(四二二七・274)
大空は恋しき人の形見かはもの思ふことに眺めらるらむ(古今集卷十四、恋四、四四、題しらず さかゐのひとさね・古今六帖第一、天の原、三三三、さかゐの人さね)〔対〕
- 24 たちかへりたがなはたゝじなどかごとがましくて(四二四八・276)
恋ひ死なばたが名はたゝじ世の中の常なきものと言ひはなすとも(古今集卷三、恋三、六三、題しらず 深養父)〔釈前〕、〔釈書〕世の中を、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕(第二句ノミ)、(一)つねなき物に、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔入〕〔評〕〔集〕
- 25 いける世のしには心にまかせねばきかでやゝまむ君がひとと(四二五九・277)

いきしなむ事の心にかなひなば二たび物は思はざらまし
〔拾遺集卷十五、恋蛩、題しらず よみ人しらず〕〔拾〕〔新〕

26 水のほとりの石にこけをむしろにてながめ給へり〔四六六・二七八〕

河上やかさぎのいは屋けを寒み苔をむしろとならず優婆塞
〔曾丹集、三三三〕〔拾〕

27 手にかくる物にしあらば藤の花まつよりまさる色をみましや
〔四六六・二七八〕

君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ
〔古今集卷三、東歌、一〇五〕 〔花〕〔弄〕〔細〕〔孟〕

28 むらさぎの色はかよへど藤の花心にえこそかゝらざりけれ
〔四七二・二七九〕

紫のひともとゆへにむさし野の草はみながらあはれとぞ見
る〔古今集卷十七、雑上、八七、題しらず 読人しらず・古
今六帖第五、むらさぎ、三四六、〕草はなべてもなつかしき
かな〔対〕〔第二句ノミ〕

29 竹がはうたひて御はしのもとにふみよるほど〔四九六・二八一〕

竹河の 橋のつめなるや 橋のつめなるや 花園に はれ
花園に 我をば放てや 我をば放てや 少女伴へて〔催馬
楽、竹河、三三〕〔引〕〔全〕〔対〕

30 かつらのかけにはつるにはあらずやありけん〔四九六・二八二〕

春がすみたなびきにけり久かたの月の桂も花やさくらむ

〔後撰集卷二、春上、一六、延喜の御時歌めしけるに奉りける
紀貫之・古今六帖第六、桂、三三三〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕
月のかつらの

31 やみはあやなきを月ばえはいますこし心ことなりと〔四九七・二八三〕

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる
〔古今集卷一、春上、四、春の夜梅の花をよめる 躬恒・古
今六帖第六、梅、三四六、躬恒・和漢朗詠集卷上、春、春夜、
三、躬恒〕〔釈前〕はるの〔初句〕、〔奥〕〔一〕〔休〕〔屋〕〔第二
句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔細〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

32 わごんをひかせ給てこの殿などあそび給〔四九七・二八四〕

この殿は 直も 直も富みけり 三枝の あはれ 三枝の
はれ 三枝の 三つは四つばの中に 殿づくりせりや 殿
づくりせりや〔催馬楽、この殿は、三三〕 〔釈前〕〔紫〕

33 むげにかくいひくのはていかならむ〔四九七・二八五〕

世の中をかくいひくのはてはてはいかにやくならむと
すらむ〔拾遺集卷六、雑上、五〇、題しらず 読人しらず・
同卷下、哀傷、三四、題しらず 読人しらず〕〔紫〕〔異〕、
〔河〕〔一〕かくいひくて、〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕
〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

34 みちのはてなるひたち帯のとてならひにもことぐさにもする
は〔四九七・二九〇〕

橘 姫

あづま路の道の果てなる常陸帯のかごとばかりもあひ見て
しかな (古今六帖第五、おび、三〇〇〇・新古今集卷十二、恋三
三三) (釈前) (釈書)、(奥) (休) (第二句ノミ)、(案) (河) (細)
〔紹〕 (孟) (屋) (岷) (引) (新) あはんとぞ思ふ、〔異〕 (入) 弄
△ (全) (対) (事) (大) (集)

35 かくいと草ふかくなりゆくむぐらの門をよぎ給はぬ (四七七〇・
290)

①草わけて立ち居る袖のうれしさにたへず涙の露ぞこぼるゝ
(新古今集卷六、雑下、一三六元、大江学周はじめて殿上許さ
れて草ふかき庭におりて拜しけるをみ侍りて 赤染衛門)

〔拾〕、〔新〕うれしきは、〔大〕

②今更にとふべき人も思ほえて八重葎してかどさせりてへ

(古今集卷十、雑下、六五五、かへし 読人しらず・古今六帖

第五、くれどあはず、三六四) (評)

36 兵部卿の官左の大臣どののりゆみのかへりだちすまゐるのあ
るじなどにはおはしまししを (五〇〇一・293)

女郎花花の名ならぬ物ならば何かは君がかざしにもせむ
(後撰集卷六、秋中、三六、すまひのかへりあるじの暮れつ
かた女郎花を折りて教慶の親王のかざしにさすとて 三条
右大臣) (河) (孟)

1 かけとどめらるゝほだしにてこそすぐしきつれ (五〇六一・298)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
けれ (古今集卷六、雑下、六五五、おなじ文字なき歌 物部
よしな) (事) (集)

2 いでやおりふし心うくなどうちつおやきて (五〇〇八・298)

①いで我を人なとがめそ大舟のゆたのたゆたに物思ふ頃ぞ
(古今集卷十、恋二、五〇六、題しらず 読人しらず・古今六
帖第三、舟、三六五) (花) (岷) (湖) (第二句ノミ)

②いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ことにして
(古今集卷十、恋四、七二、題しらず 読人しらず・猿丸大
夫集、二五〇) (紹)、(岷) (湖) (第二句ノミ)

3 花もみちの色をもかをおなじ心にみはやし給ひしにこそ
(五〇一〇・299)

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞ知る
(古今集卷二、春上、三六、梅の花を折りて人におくりける
友則・古今六帖第六、梅、五〇五) (友則集、一五五、梅の花折

りて人にやるとて・信明集、三〇三、かへし・和漢朗詠集
卷上、春、紅梅、一〇〇、友則) (釈前) (案) (異)、(岷) (下
句ノミ)、「不及引歌歌」(事) (集)

4 うちすてゝつがひさりにし水とりのかりのこの世にたちおく
れけん (五二二四・301)

卵のうち命こめたる雁のこは君がやどにてかへらざらん
ん(うつほ物語、藤原の君)〔花〕、〔孟〕かへざらんむ、
〔峽〕〔湖〕

5 すゞりにはかきつけざなりとてかみたてまつり給へば(三三
9・301)

見る石のおもてに物は書かざりきふしのやうじはつかはざ
らめや(未詳)〔河〕〔絶〕〔孟〕〔峽〕、〔湖〕つかはざりけり、
〔引〕〔新〕〔大〕〔評〕

6 なくくもはねうちきする君なくは我ぞすもりになりははて
まし(三二14・302)

④ なき人の巢守にだにもなるべきに今はと帰る今日の悲しさ
(大和物語、五五)〔河〕、〔孟〕(第三三四句)、〔峽〕〔湖〕、
〔引〕なるべきを

② 巢守にと思ふ心は留むれどかひあるべくもなしとこそ聞け
(大和物語、五五)〔河〕〔孟〕〔峽〕

③ 鳥の子はまだひながら立ちていぬかひのみゆるは巢守な
りけり(拾遺集卷三、物名、いぬかひの御湯 よみ人しら
す)〔河〕すもりなるべし、〔孟〕〔湖〕〔新〕かひのみゆるや
すもりなるらん、〔峽〕

7 かくたえこもりぬる野山のすゑにもむかしの人ものし給はま
しかばと(三三11・304)

いつくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ
(古今集卷十六、雑下、五五、題しらす・素性・素性法師集、
一五三二)〔集〕

8 いけるかひなくぞおほしこがるゝや(三三13・304)

雲居にて世を経る頃はさみだれぬ天の下にぞ生けるかひな
き(大和物語、六六)〔河〕〔峽〕よそふる頃は五月雨の、
〔孟〕、〔引〕五月雨の

9 いと山かさなれる御すみかにたづねまいる人なし(三三14
・304)

月読みの光にきませあしひきの山かさなりて遠からなくに
(古今六帖第五、人をよぶ、三三六)〔花〕〔休〕〔孟〕、〔峽〕〔私
此引歌不相叶〕、〔湖〕、〔引〕遠からずとも、〔新〕

10 あやしき下すなどぬなかびたる山がつどものみ(三三14・304)
※下すなど―すなどりの河御―すなどり人河七尾為平大鳳別
麦阿―すなどり別保

しほがまの浦には蟹や絶にけむなどすなどりの見ゆる時な
き(大和物語、三五)〔河〕

11 みねのあざきりはするおりなくてあかしくらしたまふに(二五
四一・304)

雁のくる峯のあざ霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中のうき
(古今集卷十六、雑下、五五、題しらす 読人しらす・古今六
帖第一、霧、三三二)、「世の中のうき」〔釈前〕かりのゆく
……世中のうき、〔釈書〕、〔奥〕雁の行く、〔紫〕、〔異〕雁

のなく……思ひたえせぬ花のうへかな、〔河〕〔休〕〔絶〕
〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

12 このうち山にひじりだちたるあざりすみけり(三三14・304)
わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり

〔古今集卷十六、雑下、六三、題しらず 喜撰法師・古今六帖
第三、山、三七六、きせん法師・「わが宿は……人はいふら
む」〕〔花〕△弄▽△▽△細▽〔五〕△岷〕

13 心ばかりははちすのうへに思ひのほりにこりなき池にもすみ
ぬべきを (一五二八・304)

① けふよりは露の命も惜しからず蓮の上の玉と契れば (拾遺
集卷三、哀傷、二三〇、左大将濟時白川にて説教せさせ侍り
けるに 実方朝臣・実方集、三三三、白川殿の結縁の八講
に) 〔花〕△休△紹△孟△岷△引△事〕

② ひとたびも南無阿弥陀仏といふ人の蓮の上のほらぬはな
し (拾遺集卷三、哀傷、二三〇、市門にかきつけて侍りける
空也上人) 〔花〕△孟△岷△新△全△事△対△大〕

14 河なみにきをひてきこえ侍はいとおもしろくこらく思ひや
られ侍や (一五二九・306)

ちはや人宇治川波を清みかも旅行く人の立ちがてにする
〔万葉集卷七、二三五〕〔河〕たちがたみする、〔五〕ちはやぶ
る 宇治の河波きよきかも……恋がてにする

15 あとたえて心すむとはなけれど世をうち山にやどをこそか
れ (一五六一・307)

わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり
〔古今集卷十六、雑下、六三、題しらず 喜撰法師・古今六帖
第三、山、三七六、きせん法師、わが宿は……人はいふら
む〕〔河〕△細△紹△孟△正△句△ミ△岷△引△全△対〕

〔事〕△大△集〕

16 ひじりのかたをばひげしてきこえなし給へれば猶よにうらみ
のこりけると (一五六一・307)

① 都より雲の八雲たつおく山のよ川の水はすみよかるらむ
〔新古今集卷十六、雑下、二二六、少将高光横川にのほりてか
しらおろし侍りにけるを聞かせたまひて遣しける 天曆御
歌・大鏡卷四、九〇〕〔五〕△岷▽△湖▽〕

② 百敷の内のみつねに恋しくて雲の八重たつ山はすみうし
〔新古今集卷十六、雑下、二二七、御かへし 如覚・大鏡卷四、
九〇、如覚、「九重の」△弄▽△、△細△正△句△ミ△紹〕
九重の初句、〔五〕△岷▽△湖▽〕

17 わがみにうれへあるときなべての世もうらめしう思ひしは
じめありてなん (一五二六・308)

① あすか川我が身一つの淵瀬ゆへなべての世をもうらみつる
かな (後撰集卷七、雑下、二三三、題しらず 読人しらす)

〔大〕△集〕

② おほかたのわが身一つの憂きからになべての世をも恨みつ
るかな (拾遺集卷十五、恋三、九三、題しらず 貫之) 〔集〕
18 いとあらましき水のをとなみのひびきにもわすれうちよ
るなど心とけて夢をだにみるべきほどもなげにすこくふきは
らひたり (一五二六・309)

宇治河の浪のまぐらに夢さめて夜の橋姫いや寝ざるらん
〔未詳〕〔釈前〕、〔釈書〕よる橋姫のるやはねらるゝ、〔奥〕
夢の枕に……よるはゝしひめ (不可然)、〔莖〕〔異〕〔河〕
〔岷〕よる橋姫の、〔孟〕夜は橋姫の、〔湖〕よるは橋姫いも

ねざるらん

19 おもひしやうにうばそくながらおこなふ山のふかき心法もん
など (三・12・309)

うばそくがおこなふ山のしるが本あなそぼくしとこにし
あらねば (うつほ物語、菊の宴) [花] (紹) (孟) (岷) (湖)

[引] (対) (大) (集)

20 けはひいやしくこと葉だみてこちなげにものなれたるいとも
のしくて (三・九三・309)

あづまにて養はれたる人の子は舌だみてこそ物はいひけれ
 (拾遺集卷七、物名、四三、したゞみ よみ人しらず) (孟)

[事]

21 こなたなれば舟などもわづらはで御馬にてなりけりいりもて
ゆくまゝに霧ふたがりて (三三〇七・311)

① よそにありて雲居にみゆる妹が家に早くいたらむ歩め黒駒
 (拾遺集卷十四、恋四、九二、道をまかりてよみ侍りける 人
 麿・柿本集、一三六六、「よそにして」・古今六帖第三、うま、

三三六六、「遠くありて」 (最)

② 駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるか
 な (後撰集卷十三、恋三、九六、かへし 読人しらず) (最)

22 霧ふたがりて道もみえぬしげきの中をわけ給ふに (三三〇八・
311)

ことならば山下水となりななむ人め茂きの中も行くべく
 (古今六帖第三、水、三三三三) [拾中に行くべく、] (新) 人め
 しげきが中に行くべく

23 かくれなき御にほひぞ風にしたがひてぬししらぬかとおどろ
く (三三一・311)

ぬし知らぬ香こそ匂へれ秋の野に誰がぬぎかけし藤ばかり
 ぞも (古今集卷四、秋上、三四、ふちはかまをよめる 素性

・古今六帖第六、らに、三四七、素性・素性法師集、三三三九、
 和漢朗詠集卷上、秋蘭、三〇、素性) [釈前] かにこそには
 え、(奥) (上句ノミ)、(紫)、(異) かは匂ひつゝ、八弄ノ(二)

[休] (紹) (孟) (岷) (湖) [引] (新) (全) (対) (事) (大) (評)

[集]

24 うちなる人一人はしらすにすこしめかくれてびはをまへにをき
てばちをてまさぐりにしつゝゐるたるに (三三一・314)

あけてだに何にかはせむ水の江の浦島の子を思ひ遣りつゝ
 (後撰集卷十五、雜一、二〇五、元長のみこのすみ侍りける時て
 まさぐりに何いれて侍りける箱にか有りけむした帯してゆ
 ひて又こむ時にあけむとて物のみかみにさし置きていで侍
 りにける後常明のみこととりかくされて月日久しく侍りて
 ありし家にかへりて此箱を元長のみことに送るとて 中務)

[紫] (異)

25 雲がくれたりつる月にはかにいとあかくさしいでたればあ
ふぎならでこれしても月はまねきつべかりけりとて (三三三三
・314)

① 逢ふ事はかたわれ月の雲がくれおほるけにやは人の恋しき
 (拾遺集卷十三、恋三、四四、題しらず よみ人しらず) (河)

(孟) (岷)

②秋の夜の月かも君は雲がくれししばしも見ねばこゝら恋しき
(拾遺集卷三、恋三、七五、題しらす 人麿・万葉集卷十、三
 空)〔河〕〔孟〕〔岷〕

26 かくもたづねまいるまじき山のかげちにおもふ給ふるを(三
 三三・三六)

世にふればうさこそまされみ吉野の岩の陰道ふみならして
(古今集卷六、雑下、空、題しらす 読人しらす)

〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕

27 御心のうちはなにこともすゞしくをしはかられ侍れば(三三三
 8・三17)

さざ波や志賀の浦風いかばかり心の内のすゞしかるらむ
(拾遺集卷三、哀傷、三三六、少納言藤原統理にとし頃ちぎ
 る侍りけるを志賀にて出家し侍ると聞きていひ遣はしけ
 る 右衛門督公任)〔花〕〔休〕〔絶〕、〔孟〕心のうちは〔岷〕

〔私不及引歌歎〕、〔湖〕〔新〕〔大〕

28 いとたつきもしらぬ心ちしつるにうれしき御けはひにこそ
(三三三・三三六)

遠近のたつきもしらぬ山中におぼつかなくも呼子鳥かな
(古今集卷三、春上、三三、題しらす 読人しらす)〔孟〕

29 まだきにおぼれ侍涙にくれてえこそきこえさせず侍れと
(三三三・四・三19)

さらばよと別れし時にいはずせば我も涙におぼれなまし
(後撰集卷十、離別、三三三、かへし 伊勢・伊勢集、二、三三、
 かへし、「おぼはれましを」)〔拾〕

30 かくおとなしくならせ給にける御よはひのほども(三三六・4・
 三二)※かくてをよりてかぞへ侍ればかく青池首河別国阿一
 てをよりてかずへ侍ればかく青三

手を折りて逢ひ見し事を数ふれば十といひつゝ四つは経に
 けり(伊勢物語、三三)〔紫〕〔異〕〔河〕〔岷〕〔不及引歌〕〔引〕

31 みねのやへ雲おもひやるへだておほくあはれなるに(三三九・5・
 三21)

32)

①白雲のやへにかさなるをちにても思はむ人に心へだつた
(古今集卷六、離別、三三〇、みちのくにへまかりける人によ
 みて遣はしける 貫之)〔花〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔評〕〔集〕

②思ひやる心ばかりはさはらじをなへだつらむ峯の白雲
(後撰集卷十、離別羈旅、三三〇、遠くまかりにける人に餞
 し侍りける所にて 橘直幹・古今六帖第一、雲、三三〇、橘
 のなほとも・和漢朗詠集卷下、餞別、三六、直幹)〔花〕

〔絶〕峯の八重雲、〔休〕〔孟〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕
 〔大〕〔評〕〔集〕

32 あじろは人さはがしげなりされどひをもよらぬにやあらむ
(三三〇・5・三22)

①宇治川の波の夜々音をぞ泣く網代もてるてふ人のつらさに
(古今六帖第三、網代、三三〇)〔河〕〔孟〕〔岷〕ひをのよらぬ
 は第二句、〔引〕ひをのよらねば……網代もりてか

②宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎ行く日をも知らずぞ有ま
(後撰集卷十、秋下、四〇、なが月のつこもりの日もみち
 に氷魚をつけておこせて侍りければ ちかぬがむすめ)

〔河〕〔岷〕

33 われはうかはずたまのうてなにしつげき身とおもふべき世かは (三五〇9・322)

① けふみれば玉のうてなもなかりけりあやめの草の庵のみして (拾遺集卷三、夏、二〇、題しらず 読人しらず) 〔河〕

〔孟〕〔岷〕

② 水鳥を水の上とやよそに見む我も浮きたる世をすぐしつゝ、 (紫式部日記、三三三・千載集卷六、冬、四〇、題しらず 紫式部) 〔拾〕

34 橋ひめの心をくみてたかせさすさはのしづくに袖ぞぬれぬる (三五〇11・322)

① さむしろに衣かたしきこよひもや我をまつらむ宇治のはし姫 (古今集卷七四、恋四、六六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、家とうじを思ふ、三六三) 〔河〕、〔花〕(第二句ノミ、)

〔絶〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

② ぬばたまの夜んべはかへる今宵さへ我をかへすな宇治のたまひめ (古今六帖拾遺、三三三) 〔花〕むは玉のよむべも…

…うちの橋姫、〔孟〕むは玉の…宇治の橋姫、〔岷〕うち

の橋姫

35 身さへうきてといとおかしげにかき給へり (三五〇1・323)

さす棹の掣にぬるゝ袖ゆゑに身さへ浮きても思はゆるかな (未詳) 〔釈前〕、〔釈書〕〔休〕〔絶〕〔湖〕物故に、〔奥〕、

〔紫〕袖のつゆ、〔異〕、〔河〕物ゆへに〔不本袖の懸〕、〔弄〕物ゆへに、〔細〕〔孟〕〔引〕〔拾〕、〔新〕物ゆゑに、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔集〕

36 につかはしからぬ袖のかを人ごとにとがめられぬでらるゝなむ (三五〇8・325)

梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける (古今集卷二、春上、三三、題しらず 読人しらず・兼

輔集、一三三) 〔休〕

37 色をもかをもおもひすてゝし後 (三五12・328)

君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる (古今集卷一、春上、三、梅の花を折りて人におくりける

友則・古今六帖第六、梅、三三九) 〔友則集〕、一四九) 〔信明集〕、三〇三) 〔和漢朗詠集卷上、春、紅梅、一〇〇〕 〔河〕(第二三四句ノミ、不本しる人ぞしる、) 〔孟〕〔岷〕

38 きむかきならしたまへるいとあはれに心すごしかたへはみねのまつ風のもてはやすなるべし (三五〇5・329)

① 琴の音に峯の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ (拾遺集卷六、雑上、四三、野宮に齋宮の庚申し侍りける

に松風入夜琴二といふ題をよみ侍りける 齋宮女御・古今六帖第三、こと、三三三) 〔和漢朗詠集卷下、管絃、四六、] 〔かよふなり〕 〔釈前〕〔奥〕、〔紫〕しらべそむらん、〔異〕〔河〕、

〔一〕〔正〕句ノミ、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕

〔集〕

② みじか夜のふけゆくまゝに高砂のみねの松風ふかくとぞまき

く (後撰集卷四、夏、一六、夏の夜の深養父が琴ひくを聞きて 藤原兼輔朝臣) 〔花〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕

39 ゆくすゑとをき人はおちあふれてさすらへん事(二五三・330)

身は捨てつ心をだにもはふらさじ終には如何なると知るべく(古今集卷六、雑体、二〇番、題しらず 興風・興風集、二六三、)「なると見るべく」・古今六帖第四、雑の思、三〇三、興風(新)(上句ノミ)

40 ふち衣たちかかさねかなしきことをおもひたまへし程に(二五元 6・333)

①一重だにきるはわびしき藤衣重ぬる秋を思ひやらなむ(兼輔集、二二六、帝の御服に親のを重ねて貫之が来たりにけるに詠みてやりける・統後撰集卷六、雑下、二五、延長八年諫闇の頃母の服になりて貫之が許に遣しける 中納言兼輔、)「着るは悲しき」(河)かさなる秋を、△孟▽(岷)、(引)きるはかなしき……かさなる秋を

②藤衣重ぬる思ひ思ひやる心はけふもやますざりける(古今六帖第四、かなしび、三三四、返し、貫之)(河)(岷)やすまざりけり

③あらたまの 年のはたちに たらざりし ときはの山の
やまさむみ 風もさはらぬ ふちごろも ふた度たちし
あさぎりに こゝろも空に まどひそめ みなしこ草に
なりしより 物思ふことの 葉をしげみ けぬべき露の
よるはおきて 夏はみぎはに もえわたる ほたるを袖に
ひろひつゝ ふゆは花かと 見えまがひ このもかのもに
ふりつゝも 雪をたもとに あつめつゝ 文みていでし
みちはなほ 身の憂にのみ ありければ 爰もかしこも

あしねはふ 下にのみこそ しづみけれ 誰こゝのつ

さはみづに なくたづの音を ひさかたの 雲のうへまで
かくれなみ たかく聞ゆる かひありて いひ流しけむ
ひとはなほ かひも渚に みつしほの 世には辛くて す
みのえの 松はいたづら 老いぬれど みどりの衣 ぬぎ
すてむ 春はいつとも しらなみの 浪路にいたく ゆき
かよひ ゆも取敢へず なりにける 舟のわれをし きみ
しらば あはれいまだに しづめじと 天のつりなは 打
ちはへて ひくとしきかは 物は思はじ(拾遺集卷六、雑
下、吾一、身の沈みぬることをなげきて勸解由判官にて
源順)(河)(岷)あらたまのとしのはたちにならざりしと
きはの山の山さむみ風もさはらぬ藤ごろもふたゝびたち
しあさぎりに(二部ノミ)

41 み山がぐれのくち木になりにて侍なり(二五元13・333)

①形こそみ山がぐれの朽木なれ心は花になさばなりなむ(古今集卷七、雑上、八五、女どもの見て笑ひければよめる 兼芸法師・古今六帖第二、法師、三三三〇、けうせう法師)
〔業〕(異)、(河)(紹)(新)(上句ノミ)、△弄▽(休)(五)(岷)
〔不及引歌敷〕、(湖)(引)(事)(大)(評)

②春秋にあへど匂ひもなきものはみ山隠れの朽木なるらむ
〔貫之集、二〇三、女〕(異)くち木なりけり、(事)(集)
42 めのまへにこの世をそむく君よりもよそにわかるゝ玉ぞかな
しき(二四一12・335)

声をだに聞かて別るゝ魂よりもなき床にねむ君ぞ悲しき

椎 本

〔古今集卷十六、哀傷、六五、をこの人の国にまかりけるまた女にはかに病をしていとよわくなりける時よみ置きて身まかりける 読人しらず・古今六帖第四、かなしび、三五四〕、「我よりも(第三包)……人ぞ悲しき」〔花〕〔細〕〔休〕

〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

43 あとはきえせずたゞいまかきたらんにもたがはぬことの葉
(三四三・336)

かきつくる跡はちとせもありぬべし忘れやしのお人やなからん〔未詳〕〔異〕〔河〕〔細〕、「孟」書きつくす……忘れず忍ぶ、〔岷〕〔湖〕、「引」〔拾〕忘れず忍ぶ

1 うらめしといふ人もありけるさとのなのなべてむつまじうおぼさるゝゆへもはかなしや(三四三・339)

① 忘らるゝ身をうち橋の中たえて人も通はぬ年ぞへにける
(古今集卷十五、恋五、六三、題しらず 読人しらず)〔紫〕〔異〕

〔河〕〔花〕〔岷〕〔引〕〔評〕〔集〕

② わが庵は都のたつみしかぞすむ世をうち山と人はいふなり
(古今集卷十六、雑下、六三、題しらず 喜撰法師・古今六帖第三、山、三七二、きせん法師、「わが宿は……人はいふらむ」)

〔花〕〔弄〕〔岷〕〔第二句ノミ〕、「一」〔下句ノミ〕、〔細〕〔休〕

〔紹〕〔孟〕〔湖〕、「新」〔第四句ノミ〕、「全」〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

2 ちる桜あれば今ひらけそむるなど色くみわたさるゝに(二五四・341)

咲く桜さくららの山の桜花ちる桜あれば咲く桜あり〔未詳〕

〔釈前〕、「紫」〔孟〕〔拾〕咲く桜あれば散る桜あり、〔異〕

〔河〕〔弄〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

3 川ぞひ柳のおきふしなびく水かけなどおろかならずおかしきを(二四九・341)

いな遊河ぞひ柳水ゆけば起きふしすれどその根たえせず
(古今六帖第六、柳、四九六・日本書紀卷五、一七、顯宗天皇、「なびきおきたちその根はうせず」)〔河〕〔休〕〔湖〕①〔引〕

おきふしみれど、〔細〕〔岷〕④〔湖〕④なびきおきたちその
 ねはうせず、〔細〕〔孟〕なびきおきたちその根はたえず、
 ④〔岷〕④そのねたへせず、〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔入〕〔評〕〔集〕
 ④山風にかすみふきとくこゑはあれどへだてゝみゆるをちのし
 ら浪〔翌九〇・三〇二〕

帰るかり雲路にまどふ声すなり霞ふきとけこのめ春かせ
 (後撰集卷三、春中、忒、帰る雁をききて 読人しらす)

5 一こつてうの心にさくら人あそび給ふ〔翌三〇・三〇二〕

桜人 その船止め 島田を 十町つくれる 見て帰り来
 むや そよや 明日帰りこむ そよや 言をこそ 明日と
 もいはめ 遠方に 妻さる夫は 明日もさね来じや そよ
 や さ明日もさね来じや そよや (催馬楽、桜人、二五)

△釈前▽△異▽〔河〕△弄▽△細▽〔細〕〔孟〕〔岷〕△湖▽
 〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕

6 山ざくらにはふあたりたつねきておなじかさしをおりてけ
 る哉〔翌二二・三〇三〕

我が宿と頼む吉野に君しいらば同じかさしをさしこそはせ
 め(後撰集卷三、恋臨、二〇、かへし 伊勢・伊勢集、二二七、
 古今六帖第四、かぎし、三三七〇)〔河〕、〔細〕君しこば、〔細〕
 〔孟〕さしもこそせめ、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔集〕

7 のをむつまじみとやありけん〔翌二二・三〇三〕

①紫のひとと故にむさし野の草はみななら哀れとぞ見る
 (古今集卷七、雑上、へそ、ある人のいはく此歌はさきのお

はいまうち君のなり・古今六帖第五、むらさき、三〇三、草
 はなべてもなつかしきかな)〔釈前〕〔紫〕〔異〕野をむつま
 じみあはれとぞ思ふ、〔河〕野をむつまじみあはれとぞみ
 し、〔孟〕野をむつまじみ一夜ねにけり、〔岷〕野をなつか
 しみ

②春の野にすみれ摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜寝に
 ける(古今六帖第六、すみれ、三〇三〇・赤人集、一八六〇・万
 葉集卷六、春雑、四四、山部赤人)〔釈書〕こし我は……一
 夜ねにけり、〔紫〕野をむつまじみ、〔異〕こしものを、

〔河〕〔孟〕〔尾〕〔岷〕一夜ねにけり、〔弄〕第二句ノミ、〔細〕

〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔入〕〔評〕〔集〕

8 のをわきてしもといとおかしげにらうしくかきたまへり
 (二五六・三〇四)

分きてしもなに匂ふらむ秋の野にいつれともなくなびく尾
 花に(未詳)〔釈前〕なにほふるらん秋霧の、〔釈書〕〔一〕

〔屋〕〔拾〕なびく尾花を、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、△弄▽〔不
 当也〕、△細▽引歌かなはざるか、〔休〕、△紹▽〔引歌不
 当未勘〕、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

9 しるべなくても御ふみはつねにありけり〔翌一三・三〇四〕

近江路をしるべなくても見ても見なが関のこなたはわびしか
 りけり(後撰集卷上、恋三、七六、女のもとに遣はしける
 源中正)〔花〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕えてしがな、〔岷〕〔私此引
 歌不当〕、〔湖〕〔引〕〔新〕〔集〕

10 春のつれづれはいとくらしがたくながめ給〔翌三三・三〇四〕

思ひやれ霞こめたる山ざとに花まつほどの春のつれづれ
〔後撰集卷一、春上、六、長楽寺にすみ侍りける頃二月はかりに人のもとにいひつかしける 上東門院中将〕〔花〕

〔休〕〔絶〕〔五〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕

11 宮こにはまだいらたゝぬ秋のけしきををとほの山ちかく風の音もいとひやゝかに〔五〕12・346

松虫のはつこゑさそふ秋風は音羽山よりふきそめにけり
〔後撰集卷五、秋上、三、題しらす 読人しらす〕〔花〕〔絶〕

〔休〕〔絶〕〔湖〕吹きはじめけり、〔引〕〔事〕

12 よふかき程の人のけしめりぬるに心やましく〔五〕12・347

秋の夜は人を静めてつれづれとかきなす琴の音にぞなきぬる
〔後撰集卷六、秋中、三、是貞のみこの家の歌合の歌 読人しらす〕〔休〕〔絶〕音にぞたてぬる、〔湖〕音にぞたて

つる

13 この道のやみを思やるにもをのこはいとしもおやの心をみださずやあらむ〔五〕1・347

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
〔後撰集卷十五、雑二、二、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとゞ

めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、親、

三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六六、

子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔全〕〔対〕

〔事〕〔評〕〔集〕

14 ひとり／＼なからましかばいかであかしくらさまし〔五〕18・352

思ふどちひとり／＼が恋ひしなばたれによそへて藤衣きむ
〔古今集卷三、恋三、六、橘のきよきが忍びにあひしれりける女のもとよりおこせたりける 読人しらす〕〔河〕、

〔弄〕〔絶〕〔下句ノミ〕「たれにおほせて」、〔休〕、〔絶〕誰に

15 御ぞどもわたあつくていそぎさせ給て〔五〕14・353

不知火の筑紫の綿は身に付てまだ着ねども暖にみゆ〔古今六帖第五、わた、三、弥満誓、万葉集卷三、三六、沙

弥満誓、「しらぬひ……いまだは著ねど」〔河〕〔休〕〔五〕 またはみねども、〔岷〕きてはみねども

16 あさゆふぎりのはるゝまもなくおほしなげきつゝながめ給〔五〕8・353

雁のくる峯のあさ霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中のうき
〔古今集卷六、雑下、三、題しらす 読人しらす・古今六帖第一、霧、三三三、「世の中のうき」〕〔紫〕〔事〕

17 昨日けふと思はざりけるを返々あかすかなしくおほさる〔五〕三・355

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざりしを〔古今集卷六、哀傷、二、病ひして弱くなりける

時よめる 業平朝臣・伊勢物語、三四・大和物語、七五・業

平集、一七六〔秋前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔一〕〔初句〕

① あけぬ夜の心地ながら九月にもなりぬ (二五三) 10・356
〔引〕声はきゝそや、〔拾〕声は聞かずや

② 人知れぬねやは絶えするほとときすただ明けぬ夜の心ちのみして (清正集、二六四) 五月ばかりにこと語らはむと一
声もせずといへりける女 (〔休〕、〔孟〕ねやはたえせぬ、
〔眠〕ねやはたえせぬきりぐす (私不及引歌歎)、〔湖〕
〔拾〕ねやはたえせぬきりぐす

19
そでのしぐれをもよをしがちにともすればあらそひおつることのは (二五三) 11・356
くれたけのよゝのふること なかりせば 伊香保の沼の
いかにして 思ふこゝろを のぼへまし あはれ昔へあ
りきてふ 人麿こそは うれしけれ 身は下ながら こと
の葉を 天つそらまで きこえあげ 末の世までの あと
ゝなし 今もおほせの くだれるは 塵につげとや ちり
の身に つもれることを とはるらむ これを思へば い
にしへも 葉けがせる けだものゝ 雲にほえけむ こゝ
ちして ちゞの情も おもほえず 一つこゝろぞ ほこら
しき かくはあれ共 てるひかり 近きまのりの 身なり
しを たれかは秋の くるかたに 欺き出で、 みかきよ
り 殿上もる身の みかきもり をさゝしくも おもほ

えす こゝの重ねの なかにては あらしの風も きかざ
りき 今は野やまし ちかければ 春はかすみに たなび
かれ なつはうつ蟬 なきぐらし 秋はしぐれに そでを
かし ふゆは霜にぞ せめらるゝ かゝる佗しき 身なが
らに つもれる年を するせれば 五つの六つに なりに
けり 是にそはれる わたくしの 老のかすさへ やよけ
れば 身は賤しくて としたかき ことの苦しさ かくし
つゝ ながらの橋の ながらへて なにはの浦に たつな
みの 波のしわにや おぼゝれむ さすがに命 をしけれ
ば こしの国なる しらやまの かしらは白く なりぬと
も おとはの滝の おとにきく 老ず死なすの くすりも
が 君が八千代を わかえつゝ見む (古今集卷六、雑体、
短歌、二〇三、ふる歌にくはへてたてまつれる長歌 壬生忠
岑) 〔孟〕秋は時雨に袖をかじ (二部ノミ)

20 涙のたきもひとつものゝやうにくれまどひて (三五三) 12・356
我が世をば今日かあすかに待つつかひの涙の玉といづれ勝れ
り (伊勢物語、二三・新古今集卷七、雑中、二六、布引の
滝見にまかりて 中納言行平、〔涙の滝と何れ高けむ〕
〔河〕〔孟〕湖) 涙の滝といづれたかけん、〔眠〕涙の滝とい
づれたかけん (私不及引歌歎)、〔全〕
21 かれゆく野べもわきてながめらるゝ比になむ (三五三) 10・357
鹿の住む尾上の萩の下葉より枯れ行く野辺も哀れとぞ見る
(新千載集卷五、秋下、三六、題しらず 中務卿具平親王)
〔全〕〔大〕〔評〕

22 げにかぎりありけるにこそとおぼゆるもうとましよう(三五四・
358)

限りあればけふぬぎ捨てつ藤衣はてなきものは涙なりけり
(拾遺集卷十、哀傷、二五、恒徳公の服ぬぎ侍るとて 藤
原道信朝臣・小大君集、一六三三) (休)(組)

23 こはたの山のほどもあめもよにいとおそろしげなれど(三五四
9・358)

み笠山さし離れぬときしかど雨もよにとは思ひし物を
(後拾遺集卷十、雑、三六、男の物いひ侍りけるを女を今
はさらにかじといひて後雨の痛く降りけるにまかりけり
と聞きてつかはしける 和泉式部) (河)いひしかど(翁三
包)、(孟)みにしかど、(岷)いひしかど

24 むつかしげなるさゝのくまをこまひきとむむるほどもなく
(三五四10・358)

① ささの隈ひのくま川に駒とめてしばし水かへ影をだに見む
(古今集卷十、大歌所御歌、二六〇) ひるめの歌・万葉集卷十、
三〇九(「秋前」)、(奥)(上句ノミ)「日ノ河に」、(紫)、(異)
そのまにもみん、(河)、(弄)(一)(細)(第四句ノミ)、(休)
(組)(孟)(岷)(湖)(引)(新)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

② 山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞくる君を思へば
(拾遺集卷十、雑恋、二五、題しらず 人麿、古今六帖第
二、国、三三三、人麿、「山城の木幡の森に……思ふが為は
歩みてぞくる」・万葉集卷十、三三三) (弄)(一)(細)(第三
句ノミ)、「こはたの山に」、(組)(第三句ノミ)、「こはたの

山に馬はあれども(一)
25 あさきりにともまどはせる鹿の音をおほかたにやはあはれと
もきく(三五五4・359)

① 声たてゝ鳴きぞしぬべき秋霧に友惑はせる鹿にはあらねど
(後撰集卷七、秋下、三三、題しらず 紀友則・古今六帖第
四、雑の思、三〇三、「秋山に」・友則集、一五四、寛平の御
時殿上の人々歌よみける人に代りて詠める) (異)(花)

(孟)朝霧に、(休)(組)(岷)(湖)、(引)鹿にあらねど、
(対)(事)(大)(評)

② 夕さればさほの河原の河霧に友まどはせる千鳥鳴くなり
(拾遺集卷四、冬、三六、題しらず 紀友則・友則集、一五七、
寛平の御時殿上の人々歌よみけるに人に代りて詠める・古
今六帖第六、千鳥、三三三、「秋くれば」) (大)

26 ゆくかたもなくいぶせうおぼへはべり(三五五11・361)

我が恋はむなしき空にみちぬらし思ひやれども行く方もな
し(古今集卷十、恋、一四六、題しらず 読人しらず・古今
六帖第四、恋、三三三) (休)、(組)みちぬらん
27 はつるゝいとほとすゑはいひけちて(三五五12・362)

藤衣はつるゝいとわび人の涙の玉の緒とぞなりける(古
今集卷十、哀傷、四一、父がおもひにてよめる 忠岑・拾
遺集卷十、哀傷、三三、服ぬぎ侍るとて 読人しらず、「君
こふる……緒とやなるらむ」・古今六帖第四、かなしび、三
三三、忠岑・貫之集、七九七、「君こふる……緒とぞなりぬ
る」) (秋前)、(秋書)たび人の……をとなりにける、(奥)

〔紫〕〔異〕〔河〕〔入弄〕、〔一〕をこそぞなりぬる、〔細〕〔休〕〔絶〕
 〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔一六〕〔評〕〔集〕
 28 心ぐるしうてとまり給へる御こととまものほだしなどきこえむ
 は (二五八・8・363)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
 けれ (古今集卷六、雑下、五三、おなじ文字なき歌 物部
 よしな) (新)〔事〕

29 これやかぎりのなどの給しを (二五九・11・364)

逢ふことはこれや限りの旅ならむ草のまくらも霜がれにけ
 り (新古今集卷五、恋三、三〇六、左大将朝光久しう音づれ
 侍らで旅なる所に来あひて枕のなれば草を結びてしたる
 に 馬内侍) (新)

30 秋ぎりのはれぬ雲るにいとしくこのよをかりといひしらす
 らむ

① 雁のくる峯のあさ霧晴れずのみ思ひつきせぬ世の中の憂き
 (古今集卷六、雑下、五三、題しらす 読人しらす・古今六
 帖第一、霧、三三二、「世の中のうき」〔河〕〔休〕、〔絶〕う
 きて思ひの有る世なりけり、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔事〕

② 行き帰りにもかしこも旅なれやくる秋ごとにかりくと
 鳴く (後撰集卷七、秋下、三三、題しらす 読人しらす)

〔河〕、〔一〕〔第五句ノミ〕、〔岷〕〔新〕

③ ひたすらに我が思はなくに己れさへかりくとのみ鳴き渡
 るらん (後撰集卷七、秋下、三三、題しらす 読人しらす)

〔河〕〔岷〕〔拾〕〔新〕

④ 常ならぬ身を秋くれば白雲に飛ぶ鳥すらもかりとねをなく
 (新撰万葉集卷下、秋、三三) (拾)〔新〕

31 昨日今日とは思はでたとおほかたさだめなきはかなさばかり
 を (二五〇・14・365)

つひに行く道とはかねて聞きしかど昨日けふとは思はざり
 しを (古今集卷六、哀傷、六六、病ひして弱くなりける
 時よめる 業平朝臣・伊勢物語、三四・大和物語、三五・業
 平集、二六七) (河)〔岷〕、〔新〕〔第二句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕
 〔評〕

32 我も人もをくれさきだつほどしもやはへむなど (二五二・1・365)

末の霧もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ (古
 今六帖第一、雫、三四五・遍昭集、一八七五、世のはかなさ
 とう思ひしられて侍りしかば・和漢朗詠集卷下、無常、无
 へ、良僧正) (釈前)、〔奥〕〔孟〕〔新〕〔第二句ノミ〕、〔紫〕〔異〕

〔河〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

33 君なくて岩のかけみちたえしより松の雪をもなにとかはみる
 (二五九・9・367)

世にふればうさこそ増れみ吉野の岩の陰道ふみならしてむ
 (古今集卷六、雑下、五三、題しらす 読人しらす) (河)
 〔孟〕、〔岷〕 (不及此歌歟)

34 おく山の松葉につもる雪とだにきえにし人を思はましかば
 (二五二・10・367)

① 奥山の松には氷る雪よりも我が身よにふる程ぞはかなき
 (伊勢集、三五四、松に雪のこほりたりしにつけておなじ

〔河〕〔岷〕〔拾〕〔新〕

人)〔細〕〔湖〕松葉にこぼる、〔紹〕〔引〕松葉に氷る……とぞかなしき、〔岷〕〔新〕〔全〕〔評〕〔集〕

②きえやすき露の命にくらぶればげに滞る松の雪かな〔伊勢集、三六三、返し〕〔細〕〔岷〕〔湖〕〔評〕〔集〕

③み山には松の雪だにきえなくに都は野への若菜つみけり〔古今集卷一、春上、二六、題しらず、読人しらず〕〔岷〕〔上句ノミ〕

35 さとのしるべいとこよなうもえあらがひきこえぬを〔五三二・三六八〕

あまの住む里のしるべにあらなくに恨みむとのみ人の言ふらむ〔古今集卷四、恋嘆、三三、題しらず、小野小町・小町集、一七六、人のわりなく怨むるに、「里のしるべも」〕

〔釈前〕〔奥〕〔紫〕、〔異〕あらねども、〔河〕、△弄▽〔引歌にはあらず〕、〔細〕、〔紹〕〔引歌にあらず〕、〔屋〕〔孟〕

36 くづれそめてはたつたの川のにごるなをもけがし〔五三三・三六九〕

神なびの三室のきしやくくづるらむ立田の川の水の濁れる〔拾遺集卷七、物名、三六、むろの木、高向草春・和漢朗詠集卷下、山水、五九〕〔釈前〕かみなみの、〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔上句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

37 雪をふみわけてまじりきたる心ざし許を〔五三三・三七〇〕

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪をふみわけて君を見むとは

〔古今集卷六、雑下、三〇〕、惟喬のみこの許にまかり通ひけるをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるにひえの山の麓なりければ雪いと深かりけり、しひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくて帰りまづてきてよみて送りける、業平朝臣・伊勢物語、一六〇・業平集、一六三・古今六帖第二、雪、三五三〕〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

38 かげさへみゆるしるしもあさうは侍らじときこえ給へば〔五三三・三七一〕

浅香山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは〔古今六帖第三、山の井、三六六・小町集、一七〇〕・大和物語、七〇・万葉集卷六、三〇七、「浅き心をわが思はなくに」〔釈前〕〔奥〕〔一〕〔上句ノミ〕、〔紫〕あさき心をわが思はなくに、〔異〕、〔河〕〔第二三四句ノミ〕、〔弄〕〔第四句ノミ〕

〔細〕〔休〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕△玉▽〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

39 いまはましての山にまじりはべらむもいかなる木の本を〔五三三・三七二〕

春雨のふらば野山にまじりなむ梅の花がさありといふなり〔古今集卷一、春上、三三、題しらず、読人しらず、古今六帖第一、雨、三三三、貫之、「ふらは山べに」〕〔拾〕〔新〕

40 いかなる木の本をかはたのむべくはべらむと申て〔五三三・三七二〕

わび人のわきて立ちよる木のもと頼む蔭なく紅葉散りけ

り〔古今集卷五、秋下、三二五〕雲林院の木のかけにたゞずみ
てよみける 僧正遍昭・遍昭集、一八四、雲林院の木かけ
にたゞずみありきて〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

41 たちよらむかけとたのみししるがもとむなしきとこになり
ける哉〔三三七四・372〕

①うはそくが行ふ山の椎がもとあなそばそばし床にしあらね
ば〔うつは物語、嵯峨院〕〔異〕をこなふ山は、〔花〕〔一〕

〔紹〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②片岡の向の峰に椎まかば今年の夏の蔭にならむかも〔古今
六帖第六、しひ、三三〇四、人丸〕〔河〕〔孟〕かたすかのむか

ひの岡にしるつまばこんとしこと夏かけになれ、〔峴〕
むかひの岡の椎つまばこんごと夏かけになれ

③我が宿に君こし椎の中絶えて罪の報ひや逢ひ見ざるらむ
〔古今六帖第六、しひ、三三〇六〕〔河〕〔峴〕わが宿と、〔孟〕我

が宿の

42 ちかき所くにもそなどつかうまつる人々にみまぐさと
りやりける〔三三〇五・372〕

④御馬草取り飼へ 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自
女 眉刀自女 眉刀自女 眉刀自女〔催馬楽、眉刀自女、

三三〕〔河〕〔孟〕

②この岡に草刈る小子然な刈りそね在りつつも君が来まさば
御馬草にせむ〔万葉集卷二、二二五〕〔河〕〔孟〕草かるをのこ
しかなかりそ、〔引〕かのをかに草かるをのこしかなかり

そ……君がきまさん

43 ゆきぐえにつみてはべるなりとてきはのせりわらびなどたて
まつりたり〔三三〇七・373〕

雪消えに袖はぬれつゝいつしかと春日の野べに若菜つみけ
り〔未詳〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕袖もぬれつゝ……若菜つ

むなる、〔峴〕〔湖〕〔拾〕〔評〕

44 いもゐの御だいにまられる所につけては〔三三〇七・373〕
神名火に神籬立てて斎へども人の心は守りあへずも〔万葉
集卷十、三三〇七〕〔河〕神がきにひほろぎたてゝいもへども

……まもりあへぬ物を、〔峴〕神がきに……いもゐする……
まもりあへぬものを

45 雪ふかき汀のこせりたがためにつみかはやさんおやなしにし
て〔三三〇七・373〕

①しなてるや片岡山にいひに餓ゑてふせる旅人哀おやなし
〔拾遺集卷三、哀傷、三三〇〕聖徳太子片岡の山辺道人の家

に坐けるに餓ゑたる人道のほとりにふせり、太子の乗り
たまへる馬とままりてゆかず、おちをあげて打ち給へどし
りへしりぞきてとままる、太子即馬よりおりて餓ゑたる人
のもとに歩みすゝみ給ひて紫の上の御ぞをぬぎてうゑ人の
上に覆ひ給ふ、歌よみて宣はく、〔花〕〔一〕〔第五句ノミ、

〕親なしにして、〔休〕〔第二句ノミ、〕〔紹〕〔湖〕〔引〕、
〔新〕〔第三四五句ノミ〕

②わがやどの穂薺古幹採み生し実なるまでに君をし待たむ
〔万葉集卷十、三三〇七〕〔拾〕

46 いづことかたづねておらむすみぞめにかすみこめたるやどの
桜を(二五九・374)

深草の野への桜し心あらば今年ばかりはすみぞめにさけ
(古今集卷六、哀傷、八三) 堀川のおほきおほいまうち君身
まかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける
かむつけの岑雄・古今六帖第四、かなしび、三三三三、「野へ
の桜も」〔花〕この春ばかり、〔孟〕〔岷〕

総 角

1 かくてもへぬるなどうちかたらひ給ふほどなりけり(二五七・
381)

身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこ
そありけれ(古今集卷十五、恋三、〇六、題しらず、読入しら
ず)〔釈前〕〔奥〕、〔葉〕〔細〕〔岷〕物にぞありける、〔異〕世
にぞ有ける、〔河〕物にぞ有ける(不本世にこそ有けれ、八弄)

〔二〕〔休〕〔細〕、〔孟〕世をうしと、〔屋〕、〔湖〕物にぞあり
ける(世にこそありけれ、引)〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

2 むすびあげたるたゞりのすだれのつまより(二五七・381)

娘(むすめ)子(こ)らが續(つ)麻(あ)のたたり打(う)麻(あ)懸(か)けうむ時(とき)無しに恋(こ)ひ渡(わた)るかも
〔万葉集卷十二、三九〇〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔湖〕をとめこが…

…うちをかけ、〔孟〕おとめ子がうみをくたゝりうちを
かけ…恋わたるかな、〔引〕をとめ子が…うちをかけ…
恋わたるかな、〔評〕

3 わが涙をばたまにぬかなんとうちずし給へる(二五七・381)

より合せてなくなる声を糸にしてわが涙をば玉にぬかなむ
(古今六帖第四、かなしび、三三三三、伊勢、「より合せ」・伊勢
集、二二三三)〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕〔細〕〔休〕

〔紹〕〔孟〕、〔屋〕よりあひて、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

4 ものとはなしにとかつらゆきがこのよながらのわかれをだに

心ほそきすぢにもひきかけゝむも (二五七11・382)

いとよるものならなくに別れ路の心ほそくも思はゆるかな (古今集卷九、羈旅、四三、吾妻へまかりける時道にてよめる 貫之・拾遺集卷六、別、三三、田舎へまかりける時

貫之、「別れ路は」・古今六帖第四、別、三九、貫之・貫之集、七六五、人の国へ下るに旅にてよめる、「おほほゆるかな」 (釈前)物とはなしに……おほほゆるかな、(釈書、

〔奥〕〔紫〕〔河〕〔細〕〔休〕物とはなしに、〔異〕〔入弄〕〔一〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕物とはなしに、〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

5 あげまきにながき契をむすびこめおなじところによりもあはなむ (三六一・382)

総角や とうとう 尋ばかりや とうとう 離りて寝たれども 転びあひけり とうとう か寄りあひけり とうとう (催馬楽、総角、四、河、花、入弄、一) (細)〔休〕

6 ぬきもあへずもろき涙のたまのをにながき契をいかむすはんとおればあはずはなにをとうらめしげにながめ給 (二五三・382)

片糸をこなたかなによりかけてあはずは何を玉の緒にせむ (古今集卷十、恋、四三、題しらず 読人しらず・古今六帖第五、玉の緒、三五五、「かなたこなたに」・是則集、一五七

三) (釈前) (釈書) (奥) (上句ノミ) (紫) (異) (河) (入弄) (一) (細) (休) (紹) (孟) (岷) (湖) (引) (全) (対) (事) (集)

7 み山がくれには心ぐるしくみえ給人の御うへをいとかく朽木にはなしはせずも (二五九六・383)

①かたちこそみ山がくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ (古今集卷十七、雑上、八五、女どもの見て笑ひければよめる 兼芸法師・古今六帖第三、法師、三三〇、けうせい法師)

〔紫〕〔異〕姿こそ初句、〔河〕〔岷〕〔上句ノミ〕〔弄〕〔初句ノミ〕、〔姿こそ〕、〔一〕〔休〕〔上句ノミ〕、〔姿こそ〕、〔紹〕〔第二句ノミ〕、〔姿こそ〕、引歌不及、〔孟〕心を花に、〔湖〕なさはなりけん、〔引〕〔事〕〔集〕

②落ちつもる朽ち葉が下のみなしぐりあるかなきかの世をいかにせむ (未詳) 〔異〕

③春秋にあへど句ひもなきものはみ山隠れの朽木なるらむ (實之集、一〇八三、女) 〔事〕

8 なにのたのもしげあるこのもとのかくろへも侍らざりき身をわび人のわきて立ちよる木のもととは頼む蔭なく紅葉散りけり (古今集卷五、秋下、二五三、雲林院の木のかげにたゝずみてよみける 僧正遍昭・遍昭集、一八六四、雲林院の木のかげにたゝずみありきて) (河) (上句ノミ、真本下句アリ)、(休)

〔孟〕〔岷〕、〔湖〕〔第三四句ノミ〕、〔引〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

9 松の葉をすきてつとむる山ぶしだにいける身のすてがたにによりてこそ (二五九五・383)

①夢にてもみてや心のなぐさまんあしくもよくもいこそ寝られぬ (未詳) 〔異〕

②柴のいほり苔の衣に身をやつし松のはならぬ時はなしとか
〔未詳〕〔花〕〔唄〕〔引〕

③優婆塞があざ名に刻む松の葉は山の雪にや埋もれぬらむ
〔曾丹集、三三三〕〔拾〕

10 おほかなく思つゝすぐす心をそさのあまりおこがましくも
あるかな〔五五五・389〕

山代の石田の社に心鈍く手向したれや妹に逢ひがたき〔万葉集卷三、二五五〕〔拾〕山しなの……たむけしたれば

11 袖の色をひきかけさせ給はしもことほりなれど〔五五五・391〕
奥山のはれぬ時雨ぞわび人の袖の色をはいとまましける
〔未詳〕〔釈前〕、〔奥〕〔紫〕はれぬけしきぞ、〔異〕〔河〕〔孟〕

〔屋〕〔唄〕〔引〕

12 むらどりのたちさまよふはかせちかくきこゆ〔五六一・393〕
村鳥の立ちにし我が名今更にことなしぶともしるしあらめ
や〔古今六帖第々、とり、三五三・古今集卷三、恋三、六四〕

題しらず、読入しらず〔河〕〔正角〕、〔休〕〔孟〕〔唄〕〔集〕

13 あか月のわかれやまだしらぬことにてげにまどひぬべきを
〔五五五・394〕

まだ知らぬ曙起きの別れには道さへまどふ物にぞ有りける
〔未詳〕〔花〕〔二〕、〔細〕〔紹〕道さへまよふ、〔休〕〔屋〕〔唄〕

〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 鳥のねもきこえぬ山とおもひしを世のうきことはたづねきに
けり〔五五五・394〕

とお鳥の声もきこえぬおく山のふかき心を人は知らなむ

〔古今集卷三、恋二、三五三、題しらず、読入しらず〕〔紫〕、

〔異〕人はしらじな、〔河〕、〔二〕〔引〕歌にはあらず、〔休〕

〔紹〕〔孟〕〔唄〕〔湖〕〔引〕〔事〕〔評〕

15 なごりこひしくていとかくおもはましかば〔五五五・394〕

①夜もすがらなづさはりぬる妹が袖なごり恋しく思ほゆるか
な〔古今六帖第々、あした、三五三〕〔花〕〔休〕〔紹〕〔唄〕〔湖〕

〔引〕たづさはりつる、〔屋〕たづさはりぬる、〔全〕〔対〕

〔事〕〔評〕〔集〕

②逢ふと見し夢になかなかくさらされて名残恋ひしく覚めぬな
りけり〔蜻蛉日記、二五〕〔六〕

16 わが世はかくてすぐしはてゝむと思つゝけて〔五五五・395〕

いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里のあれまくもを
し〔古今集卷六、雑下、六二、題しらず、読入しらず、古

今六帖第々、異、三五三〕〔河〕〔屋〕〔唄〕かくてしも〔初也〕、

〔休〕〔紹〕〔孟〕〔事〕

17 あげまきをたはぶれにとりなししも心もてひろばかりのへだ
ても〔五五五・395〕

総角や、とうとう、尋ばかりや、とうとう、離りて寝たれ
ども、転びあひけり、とうとう、か寄りあひけり、とうと

う、〔催馬楽、総角、咒〕〔釈前〕安介万支也上字、〔比呂

波可利也上字、〔太加利天禰田礼上毛呂比安介利上字

、〔加与利安比介上字、〔奥〕安介万支也止字、〔比

呂波可利やと字、〔左加利天禰田礼止毛万呂比安比介利

止字と々々支利安比介利と字、〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕

止字と々々支利安比介利と字、〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕

止字と々々支利安比介利と字、〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕

止字と々々支利安比介利と字、〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕

△紹▽△孟▽△眠△〔全〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 身を心とせぬ世なればみなれいのことにてこそは(二六三)14・

400)

①いなせとも言ひ放たれず憂きものは身を心とせぬよなり

けり(後撰集卷三、恋三、空六、親の譲りける女をいなども
せともいひ放てと申しければ 伊勢・伊勢集、二六三〇)

〔釈前〕〔奥〕〔紫〕、〔異〕せぬうき世かな、〔河〕〔細〕、〔休〕
〔第二句ノミ〕、〔紹〕身をも心に、〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②世の中をうしといひひてもいつこにか身をば隠さむ山梨の花

(古今六帖第六、山なし、三三二) 〔異〕

19 山なしの花ぞのがれむかたなかりける(二六四)10・400)

世の中をうしと言ひてもいつこにか身をば隠さむ山梨の花

(古今六帖第六、山なし、三三二) 〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔河〕〔一〕
〔細〕〔孟〕〔引〕いつくにか、〔異〕〔休〕〔紹〕、〔屋〕いつくにか
か身をかくすべき、〔眠〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

20 おぼしをきつるやうにをこなひのほいをとげ給とも(二六五)13・

403)

そむくとて雲にはのらぬものなれど世の憂き事ぞよそにな

るてふ(伊勢物語、一五、新後拾遺集卷六、雑上、三三三、
題しらず 在原業平朝臣・業平集、二六六・古今六帖第三、
あま、三三三) 〔対〕〔大〕〔評〕

21 まだだけはあつきほどなればすこしまろびのきてふし給へり

(二六六)4・403)

あげまきや とうとうく ひろばかりや とうく さ

かりて寝たれども とうく まろびあひけり とうく

かよりあひけり とうく (催馬楽、総角、四七) 〔評〕

22 おそろしきかみぞつきたてまつりたらむ(二六九)9・406)

①玉葛実ならぬ樹にはちはやぶる神を着くとふならぬ樹ごと
に(万葉集卷三、二一〇、大伴宿禰) 〔河〕〔孟〕〔引〕神ぞつく
てふ、〔弄〕みならぬ木々は……神ぞつく云、〔一〕神ぞ
つくてふみならぬ木には、〔細〕〔休〕〔紹〕〔湖〕神ぞつくと
いふ、〔眠〕〔大〕〔評〕〔集〕

②玉葛花のみ咲きて成らざるは誰が恋ひにあらめ吾は恋ひ
思ふを(万葉集卷三、二一〇、巨勢郎女) 〔弄〕みならずはた
が恋にあらぬわが恋おもふを、〔休〕〔紹〕〔孟〕みならずは
たが恋にあらぬわが恋思ふ、〔眠〕我が恋おもふ

23 あふ人からもあらぬ秋の夜なれどほどもなくあけぬる心ち

して(二七〇)14・406)

長しとも思ひぞはてぬ昔より逢ふ人からの秋の夜なれば
(古今集卷三、恋三、空六、題しらず 凡河内躬恒・古今六
帖第三、ふせり、三三三) みつね・小町集、一五九、かへし
〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕
〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

24 いと心うくつらき人の御さまみならひ給なよなどのちせを契

ていで給(二七〇)3・407)

①若狭なる後瀬の山のちも逢はむわが思ふ人にけふならず
とも(古今六帖第三、四、三三三) 〔異〕後にあは思ふ人

②

③

④

には、△眠▽(不及引歌)、(引)後にてふあはむかならず、(事)

②後瀬山後も逢はむと思へこそ死ぬべきものを今日まで生けれ(万葉集卷四、三三六、家持・古今六帖第二、山、三三七)、思へばぞ……けふまでもふる「新拾遺集卷四、恋四、三三三、返し、中納言家持、思ふにぞ……けふまでもあれ」(大)③かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君(万葉集卷四、三三七)(大)

25 ことよひなむまことにはづかしく身もなげつべき心ちする(二六・一〇三・407)

頼めくる君しつらくはよもの海に身も找つべき心ちこそすれ(馬内侍集、三三三、ある公達いま〜とてすかせば)〔釈前〕たつねくるみをとはずはかさのうらに身をなげつべき、〔奥〕(紫)(河)(休)(玉)(湖)(引)(拾)尋ねくる身をしとはずはよきの海に、〔異〕尋ねくる身をしとはねばよきの海に身をなげつべき、△細▽(引歌)をよぶべからず、(眠)尋ねくる身をしとはずはよきのうみに(不及引歌)

26 すべてうちあはぬ人〜のさかしらにくしとおぼす(二六二〇・408)

さかしらに夏は人まね笹の葉のさやぐ霜夜をわが独りぬる(古今集卷六、雑体、誹諧、二四四、題しらず、読人しらず、古今六帖第一、霜月、三〇六・同第三、ひとりね、三三三)(河)(下布)(五)

27 秋のけしきもしらずがほにあをきえたのかたえいとこも(二六二〇・408)

露は置けど我がをる宿の萩がえはかくこそ秋を知らず顔なれ(信明集、三〇七)(花)(休)(細)(眠)、(引)露はをけばおなじえをわきてそめける山ひめにいつれかふかき色と、はくや(二六二二・409)

同じえをわきて木の葉のうつろふは西こそ秋のはじめなりけれ(古今集卷五、秋下、二五五、貞観の御時綾綺殿の前に梅の木有りけり西の方にさせりける枝のもみち始めたりけるをうへにさぶらふをのこともよみけるついでによめる藤原かちおむ)(紫)、(異)色づくは、(河)(玉)(湖)(眠)(引)(事)

29 ことなしびにかき給へるがおかしくみえければ(二六三三・409)むら鳥の立ちにし我が名今さらることなしぶともしるしあらめや(古今集卷五、恋三、六四四、題しらず、読人しらず、古今六帖第六、とり、三三三)(紫)(異)

30 おなじあたりかへすがへすこぎめぐらむいと人わづらへなるたな〜しをぶねめきたるべし(二六三三・409)

堀り江こぐたななし小舟こぎ返り同じ人になや恋ひ渡りなむ(古今集卷五、恋四、三三三、題しらず、読人しらず、古今六帖第三、江、三三三)、「入江漕ぐ……同じ人のみ思はゆるかな」(釈前)入江こぐ……同じ人をやこひわたるべき、(奥)、(紫)(河)(休)(細)(眠)恋わたるべき、△弄▽(五)、(屋)(湖)恋わたるらん、(引)(全)(対)(事)(大)(評)(集)

31 をみなへしさけるおほのをふせきつゝ心せばくやしめをゆふらむ (二六三・四一)

①花にあかで何帰るらむ女郎花多かる野べにねなまし物を (古今集卷三、秋上、三六、寛平の御時藏人所のをのことも嵯峨野に花見むとてまかりける時帰るとて皆歌よみけるついでによめる 平さだふん) (花)〔帳〕

②女郎花多かる野べに宿りせばあやなく仇の名をや立ちなむ (古今集卷三、秋上、三六、題しらず 小野美材・古今六帖第六、女郎花、三三〇六、小野よしき・寛平御時后宮歌合、三三四四、小野美材、「句へる野辺に」・和漢朗詠集卷上、秋、女郎花、二〇) (花)〔帳〕

32 あなかしがましとはてくははらだち給ぬ (二六四・四一)

秋の野になまめきたてる女郎花あなかしがまし花もひと時 (古今集卷三、雑体、俳諧、二〇六、僧正遍昭・古今六帖第六、女郎花、三三〇五、遍昭集、一六〇六) (花)〔弄〕(初句ノミ)。(一)下句ノミ。(休)〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔事〕 (大)〔評〕〔集〕

33 しらぬ涙のみきりふたがる心ちしてなむこはいかにもてなし給ぞと (二六一・四五)

行く先を知らぬ涙の悲しきはただ目の前に落つるなりけり (後撰集卷十、離別羈旅、一三四、出羽よりのほりけるにこれかれ馬のはなむけしけるにかはらけとりて 源資)

〔弄〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕 (大)〔評〕〔集〕

34 よはのあらしに山どりの心ちしてあかしかね給 (二六五・四七)

①あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながくし夜をひとりかもねむ (拾遺集卷十三、恋三、七六、題しらず 人麿・古今六帖第三、山鳥、三二〇〇、「わがひとり寝る」・柿本集、二五八〇、和漢朗詠集卷上、秋、秋夜、三六、人丸) (河)〔孟〕〔帳〕 (湖)〔事〕〔評〕

②雲のゐる遠山鳥のよそにても有りとし聞けばわびつゝぞぬる (古今六帖第三、三七九、山どり、人麻呂・新古今集卷十五、恋五、三三〇、題しらず 読人しらず) (花)〔休〕〔帳〕はつかにも(第三句)

③あふことは遠山どりのめもあはずあはずて今夜あかしつるかな (未詳) (花)〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔拾〕

④ひるはきてよるは別るゝ山鳥のかげ見る時ぞ音は泣かれける (古今六帖拾遺、三三三六・新古今集卷十五、恋五、三三〇、題しらず 読人しらず) (屋)物はかなしき(第五句)

35 しるべせし我やかへりてまどふべき心もゆかぬあけくれの道 (二六六・四七)

明け暮の空にぞわれはまよひぬる思ふ心のゆかぬまにく (拾遺集卷十三、恋三、三三六、女のもとよりくちきに帰りて遣はしける 順) (花)〔紹〕〔帳〕〔湖〕道にぞ我はまどひぬる、 (休)〔集〕

36 かたぐにくらす心をおもひやれ人やりならぬ道にまどはゞ (二六七・四七)

人遣の道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りなむ

〔古今集卷六、離別、三六、山ざきより神なびの森まで送り
に人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる 源
さね〕〔花〕〔第二句ノミ〕、△眠▽

37 みちのほどもかへるさはいとはるけくおぼされて(二六九二・
417)

帰るさの道やは変るかはらねど解くるに惑ふ今朝の沫雪
〔後拾遺集卷十二、恋三、三三、女のもとより雪ふり侍りける
日かへりてつかはしける 藤原道信朝臣〕〔釈前〕、〔紫〕
〔異〕かへるさは

38 よをやへだてんと思なやみ給なめり(二六九三・418)

若草の新手枕をまきそめて夜をや隔てむ情からなくに(古
今六帖第三、一夜隔てたる、三三三、万葉集卷十二、三四四)
〔釈前〕〔釈書〕あげそめて、〔奥〕下句ノミ、〔紫〕〔異〕河
△弄▽、〔一〕まきこめて、〔細〕まち初て、〔休〕〔紹〕〔孟〕

39 こはたの山にむまはいかゞ待べき(二六九三・424)

山科の木幡の里に馬はあれどかちよりぞ来る君を思へば
〔拾遺集卷十九、雑恋、二四、題しらず 人麿、古今六帖第
二、国、三三三、人麿、山城の木幡の森に……思ふがため
は歩みてぞ来る〕・万葉集卷十二、二四三、木幡の山を……歩
ゆわが来し汝を思ひかね〕〔釈前〕〔釈書〕〔異〕①〔休〕やま
しろの……君を思へばかちよりぞゆく、〔奥〕上句ノミ、

〔一〕山しろの〕、〔紫〕〔河〕〔紹〕〔屋〕〔眠〕山しろの……君を

こひつゝかちよりぞゆく、〔異〕①〔孟〕〔湖〕山城の……か
ちよりぞ行く君を思ひかね、〔一〕〔第三句ノミ〕、△拾▽
〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

40 心くくなるよの中なりければいろめかしげに(二六九三・425)

世の人の心々に有りければ思ふはつらし憂きは頼まず(古
今六帖第三、相思はぬ、三三四)〔異〕、〔花〕〔引〕思ふもつ
らし、〔休〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕
41 うしろではしらすがほにひたひがみをひきかけつゝ(二六九三・
427)

① 数へつゝさてもありつる世を背くうしろでともぞ思ひやら
るゝ〔仲文集、三三三〕、堀河の中宮うせ給ひて中宮の内侍
のすけせじなど厄になりたるもとに、仲文〕〔花〕〔眠〕か
まへつゝ〔初句〕

42 しばつむ舟のかすかに行かふあとのしらなみめなれずもある
が

世の中を何にたとへむ朝ぼらけこぎゆく舟の跡のしら波
〔拾遺集卷十二、哀傷、一三三、題しらず 沙弥満誓・古今六
帖第三、舟、三三三、和漢朗詠集卷下、無常、七六、沙弥満
誓・万葉集卷三、三三、沙弥満誓、朝びらき漕ぎ去にし船
の跡なきがごと〕〔釈前〕、〔奥〕上句ノミ、〔紫〕〔異〕〔河〕

〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

〔評〕〔集〕

43 うちのはしのいとものふりてみえわたさるゝなど(二六三〇・428)

千早ぶるうち橋守なれをしぞ哀れとは思ふ年のへぬれば

(古今集卷十、雑上、二〇四、題しらず 読人しらず)〔花〕

〔帳〕

44 なかたえむものならなくにはしひめのかたしく袖やよはにぬ
らさん(二六三〇・7・429)

①忘らるゝ身をうち橋の中たえて人も通はぬ年ぞへにける

(古今集卷十、恋上、二〇三、題しらず 読人しらず)〔花〕

〔休〕〔紹〕〔帳〕〔湖〕

②さむしろに衣かたしきこよひもやわれをまつらむ宇治のは

し姫(古今集卷十、恋上、二〇六、題しらず 読人しらず・古

今六帖第三、家とうじを思ふ、二六三六)〔花〕〔紹〕〔帳〕〔湖〕

〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

45 ふるの山ざといかならむとおどろかしきこえ給(二六三三・430)

①いそのかみふるの山里いかならんをちの里人かすみへだて

ゝ(未詳)〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔帳〕

②初時雨ふるの山里いかならむ住む人さへや袖のぬるらむ

(新千載集卷六、冬、五九、寛和二年殿上の歌合に 読人しらず)

〔河〕〔帳〕袖ぬらすらん、〔花〕(第二句ノミ)、〔弄〕(初句

ノミ)、〔一〕〔屋〕袖ぬらすらん、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕

〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

46 たはぶれにくゝもあるかな(二六三三・431)

ありぬやと試みがてら逢ひ見ねば戯れにくきまでぞ恋しき

(古今集卷六、雑体、誹諧、二〇三、題しらず 読人しらず)

〔帳〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

47 つねよりもわがおもかげにはづるころなれば(二六三三・432)

夢にだに見ゆとは見えじ朝なく我が面影にはづる身なれ

ば(古今集卷十、恋上、二〇六、題しらず 伊勢・古今六帖第

四、おもかげ、二六三三、「夢にても」伊勢集、二六三六、「果る

身なれば」(釈前)、「奥(上句ノミ)、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕

(初句ノミ)、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔全〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

48 れいのとを山どりにてあけぬ(二六三三・433)

①雲井にて遠山鳥のはつかにもありとしきかば恋ひつつもを

らむ(古今六帖第三、山どり、三九六、人麻呂、「雲のある…

…よそにてもありとしきかばわびつゝぞぬる」(釈前)は

つかにはありとだにきかばこひつゝ思はん、(釈書)あり

としきかば、(奥)ありとしきかば、〔紫〕、〔異)ありとだ

にきかばこひつゝ思はむ、〔河〕〔孟〕〔帳〕雲のある、〔事〕

②あふことは遠山鳥の目もあはずあはずて今宵あかしつるか

な(未詳)〔異〕、〔湖〕(第二句ノミ)、〔事〕

49 十月一日ごろあじろもおかしきほどならむとそゝのかしきこ

え給てもみち御らんすべく申給ふ(二六三三・435)

宇治山の紅葉をみずは長月の過ぎ行く日をも知らずぞ有ま

し(後撰集卷七、秋下、四〇)、なが月のつごもりの日もみち

に水魚をつけておこせて侍りければ ちかぬがむすめ)

〔花〕〔休〕、〔紹〕しらずあらまし、〔帳〕〔湖〕〔引〕〔集〕

50 げにたなばたばかりにてもかゝるひこぼしの光をこそまぢいでめと(二五三13・436) ※たなばたばかりにてもーとして一夜のちぎりなりとも河別保ーとして一夜の契にても別陽ーひとよのちぎりにても別平

①年において一夜妹に逢ふひこぼしも我にまさりて思ふらめやも(万葉集卷十、三五三) [花] [紹] 思ふらんやぞ、[休] [帳] 思ふらんやほ

②彦星にこひはまさりぬ天の河へだつる関を今はやめてよ(伊勢物語、一六五) [花] [帳] 51 宮はあふみのうみの心ちして(二五三3・436)

いかなればあふみの海のかかりてふ人を見るめのたえて生ひねば(未詳) [釈前] ふかけれとあふみのうみぞかゝりそふ、[奥] [紫]、[異] ふかけれど……人のみるめの、[河] あふみの海ぞ(真本)の、[休]、[紹] [屋] [湖] [引] あふみの海ぞかかると、[孟] あふみの海ぞかゝるとあふみるめのたえておひぬとおもへば、[帳] あふみの海ぞ、[全] [対] [事] [大] [評] [集]

52 をちかた人のうらみいかにとのみ御心そらなり(二五三3・436) たなばたの天の戸わたる今宵さへをち方人のつれなかるらむ(後撰集卷三、秋上、三三、七日の日 読人しらす・朝忠集、二四〇〇) 七月七日人に、「今日さへや」 [花] [帳] けふさへや、[休] [紹] [湖] [引] [全] [対] [事] [大] [集]

53 あじろのひをも心よせたてまつりて(二五三6・437) ①もみぢばの流れれてとまる網代には白波も又寄らぬ日ぞなき

(古今六帖第三、網代、三五三、貫之) [河] [孟] [帳] [引] ②いかでなほ網代のひをにことはむ何によりてか我をとはぬと(拾遺集卷七、雑秋、二二、藏人所にさぶらひける人のひをの使にまかりけるとて京に侍りながら音もし侍らざりければ 修理) [花] [休] [紹] [帳] [湖] 54 身づからの御心ちはむねのみつとふたがりてそらをのみながめ給ふ(二五三8・437)

55 大空は恋しき人の形見かはもの思ふごとく眺めらるらむ(古今集卷十四、恋四、七三、題しらす さかるのひとさね・古今六帖第一、天の原、三三三) [評] [集] 55 みし人もなき山ざとの岩がきに心ながくもはへるくず哉(二六三九・438)

①奥山のいはがき紅葉ちりぬべして日の光見る時なくて(古今集卷三、秋下、三三、宮づかへ久しくつかうまつらで山里にこもり侍りけるによめる 藤原関雄) [河] [孟] [屋] ちりぬべみ、[帳]

②見し人も忘れのみゆくふる里に心ながくもきたる春かな(後拾遺集卷十、雑三、一〇三三、法師になりてすみ侍りけるところに桜のさきて侍りけるを見て 前中納言義懐) [花] [休]、[紹] きける春かな、[帳] [事] [大] [集] 56 をとにきくつき草のいろなる御心なりけり(二六四2・439)

いで人はことのみぞよき月草のうつし心は色ごとにして(古今集卷十四、恋四、七二、題しらす 読人しらす・猿丸大夫集、二五〇二、あだなる人のさすがに頼めはつれなくのみ

あれば恨みて詠める、「皆人は……相も思はず」〔釈前〕

いく人はことのみぞうき……あひもおもはず、〔釈書〕こ

との葉のみぞ、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕

〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

57 ある人のこりずまにかゝるすぢのことぞのみ〔六四九・440〕

こりずまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住

まへは〔古今集卷三、三、題しらず 読人しらず〕〔事〕

58 とりかへすものならねどおこがましく心ひとつに思ひみだれ

給〔六四〇・442〕

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と

思はむ〔未詳〕〔釈前〕ものにもがなやと……ありながら

の、〔奥〕〔上句ノミ〕、〔異〕昔ながらの、ノ弄ノ〔休〕〔紹〕〔孟〕

59 ざい五がものがたりをかきていもうとにきむをしへたる所の

人のむすばんといひたるをみて……わか草のねみむものとは

おもはねどむすばれたる心ちこそすれ〔三四九・443〕

うら若みねよげに見ゆる若草を人の結はむことをしぞ思ふ

〔伊勢物語、一〇六・古今六帖第六、春の草、三四四、業平・新

千載集卷十一、恋一、一〇七〕〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕

60 ことばにてうらなくものをとこひたる〔六四四・444〕

〔上句ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

初草のなごめつらしき言の葉ぞうらなくものを思ひけるか

な〔伊勢物語、一〇七・新千載集卷十一、恋一、一〇七〕〔釈前〕

とのほ、〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔帳〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕

〔集〕

61 御心のうつろひやすきはめつらしき人々に〔六四九・444〕

世の中の人の心は花ぞめのうつろひやすき色にぞありける

〔古今集卷十一、恋三、七、題しらず 読人しらず〕〔花〕

〔休〕〔紹〕〔帳〕

62 世中はとてもかくてもひとつぎまにてすぐすことかたくなむ

侍を〔六四〇・445〕

世の中はとてもかくても同じこと官もわらやも果てしなけ

れば〔新古今集卷十六、雑下、一五三、題しらず 蟬丸・今昔

物語集卷十四、一七三、すこしてむ〕〔異〕〔花〕ありぬべ

63 ものおもふ時のわざにときしうたゝねの御さまの〔六四六・

449〕

垂乳根の親のいさめしうたた寝はもの思ふ時のわざにぞあ

りける〔拾遺集卷十四、恋四、八、七、題しらず 読人しらず・

古今六帖第四、うたたね、三三三、小町「わざにざりける」

〔釈前〕、〔紫〕〔湖〕しわざなりけり、〔異〕〔河〕ノ弄ノ〔一〕

〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔引〕わがみなりけり〔第五句〕、

64 心つかふ人はえあらじと思へばつらきながらなむたのまれ侍

と〔六四九・450〕

松山につらきながらも波こそむことはさすがに悲しきもの

を〔後撰集卷十一、恋三、七、七、せをそ遣はしける女の又こ

と人に文つかはずと聞きて今は思ひたえねといひ送りに侍

りける返事に 贈太政大臣〔異〕くるしきものを
65 あすしらぬよのさすがになげかしきも〔六五12・451〕

明日知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ〔古今集卷十六、哀傷、六三、紀友則が身まかりける時よめる 貫之・拾遺集卷二十、哀傷、三三、紀友則身まかりけるによめる 貫之・古今六帖第四、かなしび、三三〇、貫之、「命なれども……こひしかりけれ」・貫之集、七〇、五、紀友則がうせたる時に詠める、「哀れなりけれ」〔釈前〕、〔釈書〕我が身なれども、〔奥〕、〔紫〕我が身と思へば、〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

66 たがためおしきいのちにかはとておほとなぶらまいらせて

〔二五12・451〕
岩くゞる山井の水を結びあげて誰がため惜しき命とかしる〔伊勢集、一八五三〕〔釈前〕、〔釈書〕山井の水の、〔奥〕〔異〕岩そゞろ、〔紫〕〔河〕、〔二〕〔不相当〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔事〕〔集〕

67 かくそでひつるなどいふこともやありけむ〔二五三一・451〕

①いにしへも今も昔もゆくすゑもかく袖くたすたぐひあらじな〔未詳〕〔釈前〕、〔釈書〕かく袖ひつる、〔奥〕かく袖ひつるおりはあらじを、〔紫〕〔河〕〔屋〕〔岷〕かく袖ひつる折はなかりき、〔孟〕今も猶又……かく袖ひつる折はなかりき、〔集〕

②神無月いづも時雨は降りしかどかく袖ひつる折はなかりき

〔未詳〕〔花〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔一〕〔上句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

68 あられふるみ山のさとはあさ夕にながむる空もかきくらしつゝ〔二五九・451〕

①あられ降るみ山の里のわびしきはきてたはやすくとふ人ぞなき〔後撰集卷八、冬、四六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、山里、三六五、「悲しきは……とふ人もなき」〕〔花〕〔休〕、〔紹〕とふ人のなき、〔岷〕とふ人もなし、〔湖〕〔上句ノミ〕、〔引〕〔事〕

69 さはりおほみなるほどに〔二五三一・452〕

②み山には霰ふるらしと山なる正木のかづら色づきにけり〔古今集卷三、大歌所御歌、一〇七、古今六帖第一、神楽、三〇四、貫之〕〔細〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕
みなと入りの葦わけ小舟さはりおほみわが思ふ人に逢はぬ頃かな〔拾遺集卷三、恋三、一三三、題しらず 人麿・柿本集、三三六、「恋しき人に」・万葉集卷十、二七四・同卷三、二九六〕〔釈前〕〔釈書〕恋しき人に〔第四句〕、〔奥〕〔紹〕〔上句ノミ〕、〔紫〕〔河〕〔二〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

70 なにのつみななる御心ちにか人のなげきおふこそ〔六五八・455〕

水籠みづかごの神に問ひても聞きてしが恋つゝあはぬ何の罪ぞも〔古今六帖第四、片恋、三三三〕〔花〕〔岷〕〔湖〕かみにうれへて、〔引〕神にうれへて……何のつみかは

71 人のなげきおふこそかくあむなれと〔二五九・456〕

あしかれと思はぬ山の峯にだにおふなる物を人の歎きは
〔詞花集卷六、雑上、三三〕男をうらみてよめる 和泉式部

〔休〕人のなげきはおふなるものを、〔細〕

72 かなしくなりなむのちのおもひでにも心こはくおもひくまな
からしと〔二五三・456〕

あらざらむこのよのほかの思ひいでに今一たびのおふこと
もがな〔和泉式部集、四九五〕ここちあしきころ人に・後
拾遺集卷三、恋三、七三、心地れいならず侍りけるころ人の
もとにつかはしける 和泉式部〔拾〕

73 かきくもり日かげもみえぬおく山に心をくらすところにもある
哉〔六五二・460〕

霜枯の蓬の門にさし籠りけふの日影をみぬぞわびしき〔高
光集、二四二〕おとらうせ給ひての年新嘗会の頃うちにも
参らで内侍のもとに・新勅撰集卷十六、雑三、二二六、九条右
大臣かくれ侍りにける年新嘗会のところ内の女房に遣しける
藤原高光、「みぬが悲しき」〔花〕よもぎのもとに……見
ぬぞかなしき、〔岷〕よもぎのもとに……みぬぞ悲しき

74 かいななどもいとほそなりてかけのやうによはげなるもの
から〔六五九・461〕

恋すれば我が身は影となりけりさりとて人にそはぬもの
ゆえ〔古今集卷十、恋一、三六〕題しらず 読人しらず・古
今帖第三、思ひ瘦す、三六三〔集〕

75 ひきとらむべきかたなくあしずりもしつべく〔六六八・462〕
白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消えなまし物を

〔伊勢物語、三・新古今集卷六、哀傷、六三〕題しらず 在
原業平朝臣 〔紫〕けなましものを

76 むしのからのやうにてもみるわざならましかばと思まどはる
〔六六四・463〕

うつ蟬はからを見つともなぐさめつ深草の山煙だにたて
〔古今集卷十六、哀傷、六三〕堀川のおほきおほいまうち君身
まかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける
僧都勝延・遍昭集、二六七、深草の山に納め奉りしを思ひ
参らせむ心のほどは思ひやるべし、「けぶりだにたて深草
の山」〔紫〕異、〔河〕上句ノミ、〔弄〕第ニ句ノミ、〔細〕

〔第一句ノミ〕、〔休〕〔細〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔評〕〔集〕

77 すだれをまきあげてみ給へばむかひのてらのかねのこゑ枕を
そばだて、けふもくれぬとかすかななるひびきをきよて〔六六
八・466〕

山寺の入相の鐘の声ごとにけふも暮れぬと聞くぞ悲しき
〔拾遺集卷十、哀傷、二三元〕題しらず 読人しらず・和漢
朗詠集卷下、山寺、五五 〔秋前〕〔紫〕異〔河〕△弄▽、
〔一〕〔第三四句ノミ〕、〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕

78 とりかへさまほしくなべての世もつらきに〔六六九・467〕

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と
思はむ〔未詳〕〔全〕〔対〕〔事〕〔集〕

79 ちんのやしろをひきかけて行ききながきことをちぎりきこえ

(二六七〇・469)

① 誓ひつることのあまたになりぬれば千々の社も耳馴れぬら

む〔未詳〕〔紫〕、〔異〕みえずやしぬらん、〔河〕△弄▽〔二〕

〔細〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕耳なれぬらし、〔屋〕ちかひある、

〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② 千早ぶる神も耳こそなれぬらしさまざま祈るとしもへぬれ

は〔後撰集卷十、恋三、交〇〕、かへし おほつぶね 〔拾〕

80 つれなきはくるしきものをとひとふしをおぼししらせまほしくて心とけずなりぬ。(二六七一・470)

① いかで我つれなき人に身をかへて恋しき程を思ひ知らせむ

〔千載集卷十二、恋三、セ二〕女につかはしける 徳大寺左大

臣〔釈前〕〔河〕〔二〕〔休〕〔紹〕〔湖〕〔引〕〔拾〕苦しきも

のと〔第四句〕、〔奥〕〔紫〕〔異〕いかで猶……苦しきものと、

〔弄〕〔初句ノミ〕、〔細〕いかにわれ……苦しきものと、〔孟〕

身をなして苦しきものと、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

② 心がへするものにもが片恋は苦しきものと人にしらせむ

〔古今集卷十、恋一、語〇〕題しらす 読人しらす 〔異〕つ

れなきは〔第三句〕、〔休〕〔屋〕〔拾〕

③ 恋するは苦しき物としらすべく人を我が身にしばしなさば

や〔拾遺集卷十二、恋三、七言〕題しらす 読人しらす 〔拾〕

早 蕨

1 やおしわかねば春のひかりをみたまふにつけても (二六七一・

11)

日の光やぶしわかねばいその上ふりにし里に花も咲きけれ

〔古今集卷十、雑上、七〇〕石の上のなむ松が宮つかへもせ

でいその上といふ所にこもり侍りけるを俄にかうぶり給は

れりければよろこびいひつかはずとてよみて遣はしける

布留今道・古今六帖第一、照る日、三二語、ふるのいまみ

ち、「ふりにし里も花咲きにけり」〔釈前〕ふりにしさと

の花さきにけり、〔奥〕〔紫〕、〔異〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔湖〕〔新〕

ふりにし里も、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔河〕〔二〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

2 はなとりのいろをもねをもおなじ心におきふしみつゝ (二六七

2・11)

花鳥の色をも音をもいたづらにもうかる身はずぐすのみ

なり〔後撰集卷四、夏、三三〕かへし 藤原雅正・貫之集、

〔二〇元〕返し、「色をも香をも……すぐすなりけり」〔紫〕

〔異〕すぐすなりけり、〔休〕〔引〕〔事〕

3 心ほそき世のうさもつらさもうちかたらひあはせきこえしに

こそ (二六七四・11)

世の中の憂きもつらきも悲しきも誰にいへとか人のつれな

き〔後撰集卷十二、恋三、題しらす 読人しらす〕〔拾〕

4 きみにとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬはつわらびなり (二六〇14・12)

① 都にはみるべき人もなき物をつねを思ひて春やきぬらん (未詳)〔花〕〔休〕〔岷〕

② いつしかと君にと思ひし若菜をば法の道にぞけふはつみつる (拾遺集卷三、哀傷、二三六、天曆の御時故きさいの宮の御賀せさせ給はむとて侍りけるを宮うせ給ひにければやがてそのまうけして御諷誦おこなはせ給ひける時 御製)〔拾〕

③ 花のごと世の常ならば過ぐしてし昔は又も返りきなまし (古今集卷三、春下、六、題しらず 読入しらず)〔新〕

④ 桜花春のつねにやなりぬらん咲き初めしより色のかはらぬ (未詳)〔新〕

5 このはるはたれにかみせむなき人のかたみにつめるみねのさわらび (二七〇5・12)

① 行きて見ぬ人も忍べと春の野の筐に摘める若菜なりけり (貫之集、一三二八、延喜六年月次の御屏風八帖が料の歌四十五首せじにて之を奉る廿首、子日遊ぶ家・新古今集卷一、春上、四、延喜の御時屏風に 紀貫之)〔河〕〔孟〕、〔岷〕みぬ人もゆきてしのべと、〔湖〕〔新〕

② 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をもしる人ぞしる (古今集卷二、春上、三、梅の花を折りて人におくりける 友則・古今六帖第六、梅、三〇九〇・友則集、一〇九六・信明集、三二五・和漢朗詠集卷上、春、紅梅、二〇〇)〔拾〕〔新〕〔第一〕

二句ノミ

6 みる人にかごとよせける花のえを心してこそおるべかりけれ (二六九11・14)

① 大方におく白露も今よりは心してこそ見るべかりけれ (後撰集卷六、秋中、三三、題しらず 読入しらず)〔花〕〔孟〕をく白露よ、〔岷〕

② 梅の花立ちよるばかりありしより人のとがむる香にぞしみける (古今集卷二、春上、三、題しらず 読入しらず・兼輔集、二三三)〔新〕

7 人の御うへにてさへそでもしほるばかりになりて (二六〇2・14)

わが身からうき世の中と歎きつゝ人のためさへ悲しかるらむ (古今集卷六、雑下、六〇、題しらず 読入しらず)

〔異〕わが身さへ……人のうへさへ、〔花〕うき世の中を……人のうへさへ、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕人のうへさへ、〔新〕〔対〕〔大〕〔集〕

8 おほとなぶらもきえつゝやみはあやなきたどくしきなれど (二六〇5・14)

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくる (古今集卷二、春上、四、春の夜梅の花をよめる 躬恒・古今六帖第六、梅、三〇九六、躬恒・和漢朗詠集卷上、春、春夜、三、躬恒)〔釈前〕〔紫〕〔異〕、〔河〕上句ノミ、八一、〔休〕第二句ノミ、〔紹〕〔屋〕〔岷〕、〔湖〕第四句ノミ、〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

9 いはせのもりのよぶこどりめいたりし (二六二・4・15)

① 恋しくは来ても見よかし人づてに岩瀬の森のよぶこ鳥かも
〔未詳〕 〔釈前〕ひとすぢに〔第三句〕……よぶこ鳥かな、〔釈書〕〔奥〕〔異〕〔屋〕よぶこ鳥かな、〔紫〕〔河〕〔花〕、〔弄〕〔第二句〕ノミ、〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕、
△玉▽らづれの歌もこゝにはかなはず、〔全〕〔対〕〔事〕
〔六八〕〔評〕〔集〕

② 聞くからにもゆる思ひは山城の岩田の杜になくよぶこ鳥
〔古今六帖第二〕もり、三三三〔異〕くゆるなげきや、〔拾〕
〔新〕

③ 神なびの岩瀬の森のよぶこ鳥いたくななきそ我が恋まさる
〔古今六帖第六〕呼子鳥、三三三〇六、皇子・万葉集卷六、二四九、
鏡王女) 〔河〕〔孟〕〔岷〕、〔湖〕〔二句〕ノミ、〔拾〕〔新〕〔事〕
10 いまはとてこのふしみをあらしはてむもいみじく心ほそければ (二六二・11・16)

① 菅原や伏見の里の荒れしより通ひし人のあともたえにき
〔後撰集卷十四〕恋六、二〇三、菅原のおほいまうち君の家に侍りける女に通ひ侍りける男中たえて又とひて侍りければ
読人しらず) 〔河〕〔孟〕〔岷〕跡はたえにき

② いざこゝにわが世は経なむ菅原や伏見の里のあれまくもをし (古今集卷十六、雑下、六六、題しらず 読人しらず・古今六帖第三、里、三三四) 〔花〕〔岷〕かくしつゝ、〔初句〕、〔弄〕〔初句〕ノミ、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔六八〕〔評〕〔集〕

11 はなの木どものけしきばむものこりゆかしくみねのかすみのたつをみすてむことも (二六二・2・16)

春がすみたつを見捨ててゆく雁は花なき里にすみやならへる (古今集卷一、春上、三、帰雁をよめる 伊勢・古今六帖第六、雁、三三三七、伊勢・伊勢集、一八四〇、和漢朗詠集卷上、秋、雁、三三六、伊勢) 〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔第二句〕ノミ、〔二〕〔細〕〔休〕〔湖〕〔上句〕ノミ、〔紹〕

12 御おくもかぎりあることなればぬぎすてたまふにみそぎもあさき心ちぞする (二六二・5・16)

限りあればけふ脱ぎ捨てつ藤衣はてなきものは涙なりけり (拾遺集卷十、哀傷、二五三、恒徳公の服ぬぎ侍るとて藤原道信朝臣・小大君集、二六三三、かゝる人もおはせぬを思ふにいと悲しくてかきもやられず同じ人服ぬぎ給ひし、涙のはてぞ知られざりける) 〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔事〕

13 はかなしやかすみのころもたちしまに花のひもとくおりもきにけり (二六二・11・17)

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ (古今集卷十六、哀傷、八四、深草の帝の御時に蔵人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇になりければ更に世にもまじらずしてひえの山に登りてかしらおろしてけり、その又の年みな人御おくぬぎてあるはかうぶり給はりなどよるこびけるを聞きてよめる 僧正遍昭・遍昭集、二六二・〇

〔休〕

14 やどをばかれじと思心ふかくはべるを(二六四三・19)

①今ぞ知る苦しきものと人またむ里をばかれずとふべかりけり(古今集卷十六、雑下、六六、紀の利貞が阿波介にまかりけるときに馬のはなむけせむとて今日といひおくれりける時にこゝかしこにまかりありきて夜ふくるまで見えざりければつかはしける 業平朝臣・伊勢物語、二〇、古今六帖

第三、里、三三三、業平・業平集、一三三三)〔釈前〕〔奥〕、

〔紫宿をばかれず、〔異〕〔河〕△弄▽、△細▽〕〔引歌いつれもかなはざる歎〕、△細▽〔引歌不吐〕、〔孟〕恋しき物

と……宿をばかれず(此歌不相三)、〔眠〕〔湖〕△玉▽今

ぞしるの歌はさらになはず、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

②花の香のつまを忘れぬ春ごとに宿をかれにし君をしぞ思ふ〔未詳〕〔花〕〔引〕、〔孟〕宿はかれにし人をしぞ思ふ、〔眠〕

〔引〕

③にくさのみ益田の池のねぬなはといとふにはゆるものになぞありける〔未詳〕(一)今ぞしるくるしきくさのみます田の池の

15 ましてはるやむかしのと心をまどはしたまふどちの(二六四三・20)

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身ににして(古今集卷十五、恋三、四四、五条の後の宮の西の対に住みける人にはいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隠れにける、あり所は聞きけれどもえ物もい

はで又の年の春梅の花ざかりに月の面白かりける夜去年をこひてかの西の対にいきて月の傾くまであばらなる板じきにふせりてよめる 在原業平朝臣・伊勢物語、二〇、古今六帖

第三、昔をこふ、三三三、業平・業平集、一三三三)〔釈前〕〔紫宿をばかれず、〔異〕〔河〕△弄▽、△細▽〕〔休〕、〔孟〕初句

〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

ひいでらるゝつまなり(二六四三・20)

さつ、きまつはな橘の香をかば昔の人の袖の香ぞする(古今集卷三、夏、三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、橘、三三三、いせ・伊勢物語、二四、和漢朗詠集卷上、夏、

花橘、二二二)〔奥〕〔下句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕

〔眠〕〔引〕、〔新〕〔下句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

17 そでふれしむめはかはらぬにほひにてねごめうつろふやどやことなる(二六四三・20)

①垣越しに散り来る花を見るよりは根ごめに風の吹きもこさなむ(後撰集卷三、春下、八三、朝光の朝臣隣に侍りけるに桜のいたうちりければいひ遣はしける 伊勢)〔紫〕〔異〕

〔河〕〔相〕〔孟〕〔眠〕〔拾〕〔新〕〔大〕

②色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ども(古今集卷二、春上、三三、題しらず 読人しらず)〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 はなのかもまらうとの御にほひもたち花ならねどむかしおもひいでらるゝつまなり(二六四三・20)

さつ、きまつはな橘の香をかば昔の人の袖の香ぞする(古今集卷三、夏、三三、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、橘、三三三、いせ・伊勢物語、二四、和漢朗詠集卷上、夏、

花橘、二二二)〔奥〕〔下句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔孟〕〔屋〕

〔眠〕〔引〕、〔新〕〔下句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

18 いとふにはえてのび侍るいのちのつらく(二六四三・21)

①にくさのみ益田の池のねぬなはといとふにはゆるものになぞありける〔未詳〕(一)今ぞしるくるしきくさのみます田の池の

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとの身ににして(古今集卷十五、恋三、四四、五条の後の宮の西の対に住みける人にはいにはあらでものいひ渡りけるを睦月の十日あまりになむ外へ隠れにける、あり所は聞きけれどもえ物もい

ありける(未詳)〔釈書〕いとふにはふる、〔紫〕(異)、〔河〕

〔屋〕ねぬなほのいとふにはゆる、△弄▽〔休〕〔紹〕〔孟〕、
〔帳〕〔湖〕〔引〕〔拾〕いとふにはふる、〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕
〔集〕

②怪しくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき(後撰集卷十、恋三、六六、文遣はせども返事もせざりける女のもとに遣はしける 読人しらす、拾遺集卷十、恋三、六六)〔河〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕〔拾〕〔新〕〔大〕〔評〕〔集〕

19 すべて世をおもひたまへしつむにつみもいかにふかく侍らむと(六六・10・21)

大方のわが身一つの憂きからにすべての世をもうらみつるかな(後撰集卷十、雑言、二三、題しらす 読人しらす、

「あすか川(初句)……淵瀬故・拾遺集卷十、恋三、六六、題しらす 貫之」〔釈前〕〔紫〕(異)〔河〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔帳〕

〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

20 さきにたつなみだのかはにみをなげば人にをくれぬいのちならまし(二六五・22)

①さきに立つ波のみちにてさそはれて恨みのたびに思ひけるかな(未詳)〔休〕〔孟〕、〔帳〕かぎりのたびと

②さきだゝぬ梅の八千度悲しきは流るゝ水の帰りこぬなり(古今集卷十、哀傷、八三、藤原のたゝふさが昔あひ知りて侍りける人の身まかりける時にとぶらひに遣はすとてよめる 閑院)〔拾〕〔新〕〔大〕

21 身をなげむなみだのかはにしつみてもこひしきせむにわすれ

しもせじ(二六九・22)

なみだ川底のもくつとなりはてゝ恋しきせむに流れこそすれ(拾遺集卷十、恋三、八七、万葉集和し侍りける歌 源順)

〔花〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔帳〕〔大〕

22 いかならむ世にすこしもおもひなぐさむることありなむとはてもなき心ちし給(二六九・22)

①限りあればけふぬぎ捨てつ藤衣はてなきものは涙なりけり(拾遺集卷十、哀傷、二五、恒徳公の服ぬぎ侍るとて 藤原道信朝臣・今昔物語集卷十四、一七九、小大君集、二六三、かゝる人々もおはせぬを思ふにいと悲しくてかきもやられず同じ人服ぬぎ給ひし、「涙の果てぞ知られざりける」)〔異〕

②我が恋は行方もしらすはてもなしあふを限りと思ふばかりぞ(古今集卷十、恋三、六二、題しらす 躬恒・古今六帖第

四、恋、三六五、和漢朗詠集卷下、恋、六七)〔集〕

23 みな人は心ゆきたるけしきにて物ぬひいとなみつゝ(二六九・22)

みな人は花の衣になりぬなりこけの袂よかわきだにせよ(古今集卷十、哀傷、八四、深草の帝の御時に蔵人の頭にてよるひるなれつかうまつりけるを諒闇になりければ更に世にもまじらずしてひえの山に登りてかしらおろしてけり、その又の年みな人おくぬぎてあるはかうぶり給はりなどよろこびけるを聞きてよめる 僧正遍昭・遍昭集、二六八)〔休〕〔上句ノミ〕

24 人はみないそきたつめるそでのうらにひとりもしほをたるゝ
あま哉 (二六六一・23)

① 袖の浦なみふきかへす秋風に雲の上まですゞしからなむ
(新古今集卷十六、雑上、一器器、后の宮より内にあふき奉り
給ひけるに 中務) (孟)

② わくらばに問ふ人あらは須磨の浦に藻塩垂れつゝわぶと答
へよ (古今集卷十六、雑下、六三、田村の御時に事にあたり
て津の国の須磨といふ所にこもり侍りけるに宮のうちに侍
りける人に遣はしける 在原行平朝臣・古今六帖第三、し
ほ、三四四、行平) (事)

25 しほたるゝあまの衣にことなれやうきたるなみにぬるゝわが
そで (二六六三・23)

心からうきたる船に乗り初めて一日も波にぬれぬ日ぞなき
(後撰集卷十一、恋三、七〇)、をこのけしきやうくつらげ
にみえければ 小町・古今六帖第三、舟、三三六、小町・小
町集、一九七、ある人心かはりてみえしに (河)、(弄)
(第二句ノミ)、(細)(休)(紹)、(孟)ぬれぬまぞなき、(岷)
(湖)(引)(新)(冠)(事)(大)(評)(集)

26 ささきの世もとりわきたるちぎりもや物したまひけむ (二六六六・10・
23)

君と我いかなる事を契りけむ昔の世こそ知らまほしけれ
(和漢朗詠集卷下、交友、三三、新千載集卷上、恋一、一〇三、
題しらず 読人しらず) (河)(休)(紹)(孟)、(岷)ささきの
世に、(引)

27 いやくゝわらはべのこひてなくやうに心おさめんかたなく
(二六六十一・23)

古りにし姫むすめにしてやかくばかり恋に沈まむ手童てわらわの如 (万葉
集卷三、二元、石川女郎・古今六帖第三、おむな、三三六、古
のおむなにしてや) (大)

28 ありふればうれしきせにもあひけるを身をうちがはに投げて
ましかば (二六六七・24)

① ころみに猶おりたゝむ涙川うれしき瀬にも流れあふやと
(後撰集卷十、恋三、六三、又 敏仲) (異)(河)(孟)(岷)
② 祈りつゝ頼みぞ渡る初瀬川嬉しきせにも流れあふやと (古
今六帖第三、川、三四〇)(河)、(弄) 第二句ノミ、(細)う
れしきせに、(休)(紹)、(孟)あはれあふやと、(岷)
(湖)(引)

③ かくる瀬もありけるものをとまりゐて身をうち河と思ひけ
るかな (未詳) (河)、(細)身をうき河と、(孟)(岷)(湖)
(拾)(集)

29 ながむれば山よりいでゝゆく月も世にすみわびてやまにこそ
いれ (二六六三・25)

都にて山のはに見し月なれど波より出でて、波にこそ入れ
(土佐日記、二五、後撰集卷十六、羈旅、三三六、土佐よりまか
りのぼりける舟のうちにて見侍りけるに山のはならで月の
浪のなかより出づるやうにみえければ昔安倍仲麿が唐土に
てふりさけみればといへることをおもひやりて 貫之、海
より出でて、海にこそ入れ)・古今六帖第一、雑の月、三〇三、

貫之〔拾〕〔大〕

30 めもかぢやくやくやうなる殿づくりのみつばよつばなる中にひき
いれて〔大〕6・25

この殿は 宜も 宜も富みけり 三枝の あはれ 三枝の
はれ 三枝の 三つは四つばの中に 殿づくりせりや 殿
づくりせりや〔催馬楽、この殿は三〕 〔紫〕〔異〕〔河〕△▽

31 〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
むねうちつぶれてものにもがなやと〔大〕2・26

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と
思はむ〔未詳〕 〔釈前〕〔紫〕〔河〕△弄▽、〔一〕〔下古〕△、
〔細〕〔休〕〔第二句ノミ〕、〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔評〕〔集〕

32 しなてるやにはのみづうみにこぐ舟のまほならねどもあひみ
し物を〔大〕4・26

しなてるや鳩の湖にこぐ舟のまほにもいもにあひ見てしが
な〔未詳〕 〔最〕〔河〕△弄▽△▽、〔細〕〔初句ノミ〕、〔細〕、
〔孟〕あひみし物を、〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕、△玉▽〔河海抄
万葉の引歌ひがごとなる事〕、〔事〕

33 ぬしなきやどのまづ思やられたまへば心やすくなどひこりて
ち〔大〕4・27

① 植ゑてみし主なし宿の梅の花色かはりこそむかしなりけれ
〔未詳〕 〔釈前〕、〔紫〕〔岷〕桜ばな第三句、〔異〕〔河〕、〔孟〕
かへてみし、〔屋〕

② 浅茅原主なき宿のさくら花心やすくやかせにちるらむ〔拾

遺集卷一、春、三、あはれて、人も侍らざりける家に桜の

咲き乱れて侍りけるを見て 惠慶法師・惠慶法師集、三、四

六、昔人の家ありける所の前なりける桜のいとおもしうか

りけるを見て〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕④〔屋〕〔岷〕④谷ふかみ

みる人もなき、〔花〕〔弄〕〔一〕、〔細〕〔初句ノミ〕、〔休〕〔細〕

⑤④〔岷〕④〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

⑧うちつけに寂しくもあるか紅葉はも主なき宿は色なかりけ

り〔古今集卷六、哀傷、△△〕、河原のおほいまうち君の身

まかりての秋か家のほとりをまかりけるに紅葉の色まだ

深くもならざりけるを見てかの家によりていれたりける

近院の右のおほいまうち君、〔岷〕さびしかりけり〔第五句

れい〕のいかにぞやおほゆる心のそひたるぞあやしきや〔大〕三

7・27

とりかへす物にもがなや世の中をありしながらの我が身と
思はむ〔未詳〕 〔細〕〔岷〕〔第二句ノミ〕、〔集〕